

## 運命のパートナーと幸せな結婚をするには

現在人は、結婚に対してたいへんネガティブです。うまくいった結婚より、うまくいかない結婚の話ばかりがまかり通っています。

それゆえ自分にも運命のパートナーが必ずいるとは、なかなか信じられません。幸せな結婚生活、家庭生活というものをイメージできないのです。

熱烈な恋愛をしているカップルでも、結婚したら家族になってしまい、恋愛の気持ちはさめていく。会うたびに求め合ったセックスも、日に月に減少し、子供ができたことをきっかけにセックスレス生活になっていく。

精神的なつながりが結婚であり、性的なつながりはもはや結婚では充足できず、子供優先の家庭の中で自分たちはただ義務を果たすために家族を育てなければならない。

もはや結婚は自分たちの幸せを実現してはくれない。子供はどうやって育てたらいいのかわからない。自由もなく、満足もない結婚生活に不満を持ち、やがて離婚。

そんな未来像をたたき込まれている現代人は、なかなか結婚や家庭に幸せなビジョンを持ってません。

## 思考現実化プロセス

自分のビジョン（未来像）・思考・感情といった信念・観念・想念が現実を引き寄せ、創造しています。

このスピリチュアルな原則は「バシヤール」「神との対話」「ザ・シークレット」といった最近の優れた本だけでなく、出口なおの「喜べば喜び事がくるぞよ」、岡田自観の「人間は想念次第」といった数々のマスターたちが語った教えに示されています。「笑う門には福来たる」などという言葉にも、端的にこの秘密が明かされています。

なにより、神社で鏡がご神体であること、現実を「うつしよ」と呼ぶように、自分を取り巻く人生、現実の世界はすべて自分の内面の写し鏡であると言われています。

**現実がそうだから、自分がそう信じるようになったのではなく、自分がそう信じるから、現実がそうなっていくというのですね。**

私たちは、この法則に「思考現実化プロセス」と名付けました。この思考現実化プロセスは宇宙において正確に機能しています。自分の信念・観念・想念が、現実に作用し、自分のこれからの現実を作り出します。

これを信賴するならば、自分の中に「結婚はうまくいかない」「幸せになれない」「運命のパートナーなんていない」と信じていれば、そのような人生が展開することになります。

「結婚は幸せだ」「結婚は自由だ」「運命の相手は必ず存在する」「運命の相手に必ず出会える」「子供を育てるのは簡単だ」「結婚後も若々しくいられる」「結婚でセックスが充足する」「結婚は成功の近道である」

もし、このような信念・観念・想念を持っていたら、それが現実化します。

しかし、実際に自分の周囲にこのような人がいないと、自分ではそう信じたいと願っていても、不安や疑い、迷いが常に出てきます。すると、出会うにも時間がかかってしまいますし、実現するために多くの困難を越えなくてはなりません。常に不安や恐れ、迷いがついてまわります。何度も諦めようと思うことでしょう。だから、出会うまではとても苦しい思いをします。常に欠乏を

感じます。

それはあまりに狭い信念を持っているからです。「結婚しなければ幸せになれない」、「結婚しなければ愛を得られない」、「運命の相手に出会わなければ真の幸福を得られない」などの恐れを前提にした信念です。

自分の人生は、自分が心の奥で何を信じるかを選択するかで決まります。そこに、良いも悪いも、正しいも間違っているも、ふさわしいもふさわしくないもありません。すべては自分が選択して、引き寄せ、招き、創造しているのが、人生という体験です。

神は運命も、宿命も、使命も与えません。自分がすべて、体験を望み、選択をしました。その選択を神はすべて叶えます。だから神は愛であり、人間は自由なのです。

現在の状況はすべて、自分の自由な魂が選択した結果です。例え、いまの顕在意識では理解できないことであっても、納得できないことであっても、まずはそれを受け入れるとき、自分が自由であることを受け止めたこととなります。

「人間に自由などいかにばかりもない」という信念・観念・想念を持てば、「人間に自由などない」という体験を選択することになり、不条理な運命や宿命に翻弄される人生を体験することになるでしょう。それもまた、選択の自由です。

もし、幸せな結婚を体験したいと思えば、まずは自分の心の奥に存在する結婚に対するネガティブな信念を書き換える必要があります。運命のパートナーと出会いたいと思えば、まずは「そんな相手などいない」「そんなことを信じるのはバカだ」といった世間的価値観を手放し、新たに書き換える必要があります。

自分自身の人生を、自分の意志で選択したいという、愛と自由を求める勇敢なスピリチュアリストに向け、この文章は書かれています。

## 運命のパートナーとは

まず、運命のパートナーとは実際にどういった相手のことを言うのでしょうか。

ここでいう運命のパートナーとは「自分にとっての理想をすべて実現している相思相愛の相手」のことです。

一人一人、理想の相手に求める内容は違います。そこには様々な要素があるでしょう。内面的な部分から外面的な部分まで、理想像は千差万別です。そのような理想の相手が、まずこの地上に存在し、会うことは可能かどうか？

昔から、いわれている「赤い糸」のように、生まれながらにして決められた宇宙的な許嫁みたいな人が存在するのでしょうか？

世界の人口の55億人の中で、異性が半分として約30億人。日本人だけなら一億五千万として、七千万人。その中から、たった一人の人を見つけ出すとすると、確率的には七千万分の一です。宝くじの当選確率のほうが遙かに高いでしょう。となると、それはほとんど不可能と言うことになります。

このような三次元的な世界観でいけば、自分の理想とする運命のパートナーに出会えるのは、幸運なごく少数の人だけであり、そのためにはよほど自分が魅力的な人間になり、競争に打ち勝ち、魅力的な女性を奪い取らなければなりません。あるいは、何度も試行錯誤し、つきあっては別れてを繰り返しながら、理想の相手を捜し求める、ということになります。

さらに、周囲の結婚した夫婦の現実をみると、困難さを証し立てるような事実ばかりです。それがますます、理想の相手との出会いを「困難だ」と考え、そのような信念・観念・想念を抱きます。

しかし、「思考現実化プロセス」の存在を受け入れるなら、全く異なった信念・観念・想念に至ります。

●運命のパートナーはいるのか、いないのか？

↓

いるという信念を持てば出会うという現実を体験します。

いないという信念を持てば出会えないという現実を体験します。

●理想のパートナーは存在するのか、しないのか？

↓

存在するという信念を持てば、存在するという体験をします。

存在しないという信念を持てば、存在しないという体験をします。

●自分には運命のパートナーと出会えるのか、出会えないのか？

↓

出会うという信念を持てば、出会うという現実を体験します。

出会えないという信念を持てば、出会えないという現実を体験します。

シンプルな話です。全部、自分次第なのです。要は、どんな体験をしたいと思うかです。選択の結果なのです。ただその選択を、意識的にしているか、無意識のうちにしているかの違いです。

ほとんどの人は、自分の内面を、テレビのように受信するに任せていて、味わうことも、制御することも、ほとんどしていません。無意識に任せています。すると、それは自分の自由意志による選択ではなく、外部環境から流し込まれる情報をそのまま信じ、選択していることになります。

その情報源は、両親・教育・マスメディアですから、親や、学校や、テレビや雑誌などと言われているとおりの人生が展開することになるのです。それでもいいならかまわないのですが、それが自分にふさわしくないのであれば、自分の内面を探索し、現実の原因となっている自分の観念を自覚し、書き換えれば

いいのです。

## 自分の信念を観察する

もし、運命のパートナーと出会って、理想の相手と巡り会い、すばらしい結婚をして、毎日を愛に溢れた生活をしたと思ったら、それにふさわしい信念・観念・想念を持たば、それが現実反射して、そのような体験をするはず。そう思っているのに、逆の体験をするなら、よくよく自分の信念・観念・想念を観察してみましょう。

「運命のパートナーがほしい（でも今はいない）」→いないという現実を体験

「運命のパートナーがいたらいいな（でもいるとは限らない）」→いるとは限らないという現実を体験

「理想の相手に出会えたらな（でも無理だろう）」→無理だろうという現実を体験

「理想の相手と結婚できる人がうらやましい（自分は無理だろう）」→無理だという現実を体験

心の中で、最初から「足りない」「無理だ」「だめだ」「できっこない」「困難だ」「やめとけやめとけ」という声がセットになっていませんか？ 打ち消しているその声も、そのまま宇宙に響いているのです。これが問題になります。

頭ではそう信じたい、そう願いたい、そう夢に描きたい。でも、現実には無理に違いないという思いが、強く作用しています。それが現実化してくるので、さらに欠乏感、無力感、未達成感がセットになってしまうのです。この部分をまず、自覚してみる必要があります。

多くの場合、理想や夢や希望を描くとき、そこには根底に、現在の自分に対する欲求不満があります。今の自分が満たされていない。それを運命のパートナーに出会うことで、満たしてほしい。だから出会うことを求める。ということは、出会わない限り、不足感、未充足感を周囲に発散し続けることになります。すると、その想念が現実化するので、いつまでたっても「求め続ける状態」を続けることになってしまうのです。

これが「笑う門には福来たる」の法則です。最初に自分の心が満たされていないと、現実には満たされることが起こってこないのです。

運命のパートナーに出会うための、理想的なメンタリティは次のような状態です。

自分はいま、愛に溢れている。豊かな愛に満たされている。とても幸せだ。運命のパートナーに出会えば、その人に自分の溢れる愛を注いであげられるし、相手の愛によって自分もまたさらに愛を受け取ることができる。そんな相手が必ず自分には用意されていて、いまもこの世界に生まれ、育ち、出会うための準備をしている。

我々はすでに出会っている。そして引き寄せあっている。いま、一人である寂しさや孤独を知るからこそ、その人との出会いは最高の感動と幸せと充足を与えてくれる。すべては完璧で、神の愛に祝福された二人だ。今も、その相手と魂は結び合っている。いずれ体も結ばれるだろう。その声を聞くことができるし、感じるすることができる。すべてをかねそなえたパートナーがいる。響き合っている。なんて嬉しいことだろう。

モーツァルトの「魔笛」のように、彼と彼女が笛と鈴で響き合い、引き寄せあう、そんなイメージです。

このような精神の状態、毎日わずかでも、内的平静の時間をとって、上記のような精神状態になれば、すでに出会う前から、出会って以降と同じ信念・観念・想念を持つことができます。強力な信念となって、現実を動かすでしょ

う。

しかし、実際にやってみるとわかりますが、頭の中でお題目のように、上の文字を唱えることはできても、感情移入していくことはかなり困難だと思います。

最初の部分「私は今、愛に溢れている」。ここがすでに困難です。最初からこういう人は、そもそもこの本を必要とはしない人たちでしょう。自分自身が愛に溢れ、充足と感謝と幸せを感じている人は、すでにそのような人々に囲まれているでしょうし、囲まれていなくてもなんの恐れも不安もなく、宇宙や神との一体感を体験できるはずです。

運命のパートナーと出会いたいと思う、その動機に「愛の欲求不満」がある場合、まず出会う前に、どうして自分はこれほど愛の不足を感じ、苦しんでいるのだろうかと考えてみましょう。

## 愛と愛情の違いに気づく

すでに自分は愛に満たされていて、十分に満足している人はここを飛ばしていただいてもかまいませんが、そうでない方はここで自分自身の中にある、愛の欠乏感、愛の不足感、愛の欲求不満を解消したい、埋めたい、補完したいという思いが、どういった影響を与えているかを考えてみたいと思います。

「思考現実化プロセス」においては、常に心の中の信念・観念・想念がそのまま人生における現実反映されます。

ということは、「運命のパートナーと出会いたい」と願う心の奥に、「自分は愛が不足しているから」「愛が欠乏しているから」「愛を補ってほしいから」という願いがあるということは、「自分は今愛に満たされていない」という信念・観念・想念を抱いているわけですから、これがそのまま現実反映すれば



「自分は愛に満たされず、愛を欲している」という現実を体験します。

つまり、渴望している状況を引き寄せてしまうわけです。

「運命のパートナーに出会える」というポジティブな信念は、ネガティブな信念より強い力を持ちますが、それでも欠乏感が根深ければ、実際に出会うまでに相当な困難を要するでしょうし、あまりにネガの力が強すぎれば、ポジティブな信念そのものが保てなくなってしまうでしょう。

では、この欠乏感・不足感・渴望感はどのようにすれば消えるのでしょうか。

## 愛の不足の原因

その方法をお伝えする前に、まずこのような「愛の不足」の原因はなにかについて考えてみましょう。

ほとんどの人が思い当たるのは「親の愛の不足」ではないでしょうか。「愛の不足」であって「愛情の不足」でないことに注意してください。ですから、ここには「愛情過多」も含まれます。

親が子供に対し、愛で接するか、愛情で接するかは大きな違いです。

親が子に、愛で接するとき、信頼と自由を根底におきます。親が子に、愛情で接するとき、心配と束縛になりがちです。

子供はいくつもの段階を超えて成長していきます。最初、子供は純粹かつ単純な心と強力なエネルギーを持った、コントロールできない知性の存在ですが、成長するに従い心は多面的になり、エネルギーは繊細さを持ち、知性でコントロールできる存在へと変わります。

その段階に応じて、親は子供をできるだけ自分の力で様々な体験を選択できるように、教えつつ守りを解放していきます。そしてできるだけ早い段階で、自立した人生を歩むことをテーマに教育を与えつつ、様々なリスクに直面したり、ネガティブな体験をしたりすることも含め、子供に自由を与えていくのが愛で接する親の生き方になります。

ところが、愛を愛情と勘違いすると、子供を信頼するのではなく心配するあまり、親の価値観を押しつけたり、むやみに自由を抑圧したり、体験する機会を狭めてしまいます。たとえば「子供には苦労させたくない」という価値観は、「苦労は悪いものだ」という親の一方的な価値観の押しつけでしかないのですが、それが「愛」だと勘違いしてしまいます。

しかし、感動や幸福、充足などのポジティブな体験をするためには、反対のネガティブな体験は必要なのです。一時的な不安や恐れ、苦労や努力、孤独や失敗などがあるからこそ、成功や感動や充足、幸福という体験が可能になります。それを、「苦労させたくない」という理由で体験を狭めた結果、「感動」も体験できなくしてしまいます。

若い人が、夢や希望を感じられなくなった理由の一つは、あまりにリスクを回避することを、愛情や教育だと考えた結果です。甲子園でも駅伝でもオリンピックでも、苦しい練習を超えて勝利したからこそその涙でしょう。

運命のパートナーとの幸せな結婚をするためには、やはり恋愛の経験は不可欠ですが、それはすなわち失恋の経験です。最初からなんの苦もなく愛する人と出会い、結婚できたとしたら、果たしてその人は一生続くだけの幸せと充足を感じられるでしょうか。

幸せな結婚をした中で、過去に一度も恋愛で失敗もなく、孤独の経験もなかった人はほとんどいません。再婚した人ほど、むしろ幸福な結婚をしています。

ネガティブな経験を子供が自ら望むことは当然のことなのです。なぜなら、人間は喜びを体験するために生まれてきたからであり、そのためには喜びと正反

対のことを知らねばならないのです。その経験によって、単なる知識から、感情の伴った体験へと結びつくのです。

人生は冒険であること。それを受け入れない限り、愛と自由を親として子供に与えることは容易ではありません。

かといって、まだ自分で自分を制御できないうちから自由を与えすぎるのは、単なる放任でしかありません。子供の発達段階、成長段階を見極めつつ、一段一段ハードルをあげていく見識と感性が必要になってきます。しかし、常に子供と対話をし、スキンシップをとっていれば、次の段階に入ったことを、子供自身がさまざまな行動によって教えてくれます。それを感知すれば、間違うことはないはずです。

このような「愛」で接する生き方を、二十世紀の親たちはしてきたかという、残念ながらほとんどの場合、「愛情」で接してきました。子供の自立を促し励ますのではなく、自分の価値観を押しつけ束縛する方向か、あるいは放任するかでした。

「どうやって育てたらいいんだろう」「子供が死んでしまったらどうしよう」「子供が病気になったらどうしよう」「子供が問題を起こしたらどうしよう」「子供が不幸になったらどうしよう」「子供をちゃんと育てられなかったらどうしよう」「うちの子供は弱いから生きていけない」「子供は親のできなかつた夢を叶えてくれる」「とても自分に子育てなんかできない」「子供なんてバカだからなににするかわからない」「子供を手放したくない

このような信念・観念・想念を親が持っていたとしたら、当然それが現実化します。さらにそれを「愛」という名のもとに正当化できるので、子供は親に対し、反論ができません。でも、心の中では何かがおかしいと思っていますから、行動に出ます。そしてさまざまな問題行動を起こすこととなります。

それは「愛の不足」が原因です。「愛情」という名の恐れ・不安・迷い・束縛を与え続けて、「愛」である信頼・喜び・肯定・自由を与えなかったからです。

もちろん、親だって自分なりに精一杯やったわけですが、そのやり方を誰も教えてはくれませんから、結局自分が受けたやり方をそのまま子供にするしかなかったのです。

つまり、ほとんどの人は「親から愛を十分に受けていない」と感じているのです。

**愛は信頼や自由と一つのものです。**

**愛情は心配や不安、恐れとくっつきやすい。**

愛だと思って、不安や恐れを流し込んでいる親がほとんどなのですね。だから、子供の側は、自分は信頼もされていないし、自由にもさせてもらえない。どこに愛があるのだろうかと不安になるのです。

もう一度、自分の中に「運命のパートナーと出会いたい」「幸せな結婚をしたい」と願う、その心の奥に「親から十分な愛を受けていない」という思いはないか、よく見てください。

あんなに一所懸命育ててくれた親に「親から十分な愛を受けていない」などと考えるのは申し訳ない、と思うかもしれません。親を弁護したくなるでしょう。だからといって、自分の気持ちをごまかしたり、押さえ込んだりしたら逆効果です。

自分を正直に見つめてみましょう。そのとき、どうか自分を責めないでください。

「自分は信頼されていない」「自分は自由ではない」そういう思いがもしあるとしたら、それは自分が悪いからではありません。親が愛だと思って、愛情という名の心配や恐れ、不安を送っていたのです。

親に対して怒りや憎しみ、無力感などを感じているかもしれません。親を赦し

てあげてください。みんな精一杯やったのです。ただ、どうやっていいかを知らなかっただけです。

どうして、パートナーと出会うために、親が関係するのか、疑問に思った方もいるでしょう。

実は、幸せな結婚を阻害する、もっとも大きな要因は、両親との関係における、愛と愛情の混乱なのです。

もう一度繰り返します。愛は、喜び、快楽、信頼、自由です。愛情は、恐れ、苦痛、不安、束縛を含みます。

愛を愛情と勘違いして育てられれば、子供も同じことを自分のパートナーにし、やがては自分の子供にも同じことをすることになります。どこかで、連鎖を終わらせなければなりません。

運命のパートナーと出会い、幸せな結婚をしたいと願うなら、愛情という名の恐れや不安を受けた自分を癒し、愛を与えられる自分に、自分の力で変わるしかありません。

そしてそれは、思ったほど難しいことではないのです。

問題点が明らかになり、自分の中にもそれがあると気づくことが、もっとも難しいのであって、ここまで読んで「ああ、そうか！」と気づき、様々な謎が解けただけで、問題はほとんど解けたも同然です。

あとは「自分を癒したい」「自分を変えるのはどうしたらいいだろうか」という信念・観念・想念を持てば、必ず問題を解決する、自分にあった方法に出会えます。そういう現実を創造するのです。

まずは、自分の中の「愛」と「愛情」の違いを、よく見つめ直してみてください。多くの示唆に富んだ助言を、自分自ら引き出すことができるでしょう。

## 幸せな結婚生活とは

では「幸せな結婚生活」とは具体的にいうと、どんな生活なのでしょう。

運命のパートナーとは、自分の抱いた理想をすべてかねそなえている相手というだけでなく、まさに「運命的」としかいいようのない、ドラマティックな出会い方をします。無数のシンクロニシティを経て出会います。

運命のパートナーと出会った多くの友人たちに、結婚までのいきさつを聞くと、ありえないような偶然がおりなす、すばらしい出会いを体験しています。

話はそれますが、よくそのような運命的な出会い話を、否定的に捕らえたり、妬んだりするのは、自分自身でそのような出会いを遠ざけることになります。成功者になりたければ、成功者の話を聞き、自分もきっとそのようになれると信じるのが、一番の早道だといわれます。

幸せな結婚においても同様です。幸せな結婚生活を送っている人は、「自分は幸せだ」などと下手に言おうものなら、すぐに周囲から否定的な感情を浴びることになるため、あまり話そうとしません。

逆に不幸な結婚をした人ほど、それ見たことかと愚痴を吹聴しますので、結婚しても不幸になるだけだという信念・観念・想念が一般化してしまうのです。

ただ、あまりに自分の幸せを吹聴したり、自慢したりする人も要注意です。本心はあまり満足できていなかったり、自分の幸せを確信できていない場合があります。人に幸せだと承認、保証してほしいという欲求が強すぎるのです。心の中に、不安、恐れ、迷いがあるため、結局わざわざ自分を不幸に落とし込むようなことをします。

幸せな結婚をして、充足と感謝を感じている人は、世の中に少なからず存在します。ただ、幸せで満足している人は、あまりそれを吹聴したり、語ったりしません。

ですから、もし自分も、運命のパートナーと出会って、幸せな結婚をしたいと望むのであれば、まず周囲で幸せな結婚をした人を探してみてください。そして会って話を聞いたり、実際に家に遊びに行ったりして、「自分もこうなりたくない」と思う夫婦をモデリングしてみてください。

それが一番の、幸せな結婚観を自分の中に根付かせる早道です。

このような運命的な出会いをしたという、事実そのものが、大きな信頼につながります。それは、大きな事件とか、目に見えるような形でなくてもかまいません。もちろん、他人が承認するかしないかはどうでもいいことです。自分たち二人が、不思議な何かに引きつけられ、結びつけてもらったという感動は、結婚後も強い信頼を、互いに持ち続ける基礎になります。

そしてそのような基盤は、互いを絶対に裏切らない、という信頼に結びつきます。

幸せな結婚をした人たちは、互いにとても魅力的に映りますので、独身時代はもてなかった人でも、とてももてるようになります。まるで、幸せになった二人を罠にかけたいと思うかのように、周囲からさまざまな異性が近づいてくることもあるでしょう。そんなときでも、二人はお互いの幸せに満足しているので、それを壊すような選択をする必要がありません。

つまり、運命のパートナーとは身体の相性も抜群にいいということなのです。

## 結婚とセックス

セックスの相性は、結婚後非常に重要です。これがもとで、離婚に至る夫婦が圧倒的に多いのですが、結婚前は恋愛にのめり込んでいるので、セックスが互いに高まりあった状態しか経験していません。

しかし、結婚後、精神的に落ち着いてくると、セックスの相性の違いがだんだん明らかになってきます。セックスの相性とは、一言で言うと、性欲の強弱です。片方が強くて、片方が弱いと、どちらかが不満を持つようになります。セックスレスが問題になるのは、このような場合です。どちらも弱い、どちらも強ければ問題にはなりません。

運命のパートナーは、この性欲の強弱や、セックスに対する価値観が近く、しかも常に互いにとって魅力的で若々しく、新しく感じられるので、飽きることはありません。

なぜなら、互いに信頼感があり、支え合う関係になるため、つねに結婚生活から力を得て、自分を変化させること、高めることにエネルギーを集中できるからです。それぞれの個性によって互いを見守り、支援し、理解しようとして、さまざまな感情のぶつかり合いも、話し合い、コミュニケーションを密に重ねることで、一つ一つ乗り越えていきます。

そのため、互いに若々しく、新しく、進歩し続けていけるのです。これが同じ人間でありながら、異なった人間であるかのように新鮮に感じられる理由です。

相手が裏切らないという絶対的な信頼感があるので、たとえば一時的に自分が、パートナー以外の異性に魅力を感じたときも、「自分は〇〇を好きになった」ではなく「自分は〇〇に魅力を感じている」と、素直に相手に伝えることができます。

なぜかという、自分がパートナー以外の異性に感じた魅力は、まもなくパートナー自身が進化して、自分の魅力として追加することになるからです。これは、無意識にでも、そうなるのがパートナーシップのとても不思議なところです。



通常の考え方だと、自分のパートナーが自分以外の人に魅力を感じると、「不倫じゃないか」「奪われるのではないか」といった不安や恐れから、怒りや抑圧などをかけ、関係が不安定になってしまいますが、新しい異性への魅力の発見は、常に自分のパートナーの魅力に追加されるとなれば、何も恐れることはなく、むしろ大歓迎ということになります。

もし、地球上のすべての人類が、愛情ではなく、愛で生きようになれば、一夫一婦制である必要はないかもしれません。すべての人が愛で結ばれ、所有でもなく、契約でもなく、束縛でもなく、恐れでもなくなれば、結婚という仕組みそのものが不要になるでしょう。しかし、現在の地球上のレベルでいけば、セックスはパートナー以外と結ばないと決めることは、自分たちを周囲から守る上で不可欠です。

なぜなら、仮に自分たちのカップルは、誰とセックスしようとかまわないと同意していたとしても、他のカップルはそうではありません。強い怒りや憎しみ、苦痛を体験します。保証や所有を求め、欠乏や不安を体験します。周囲にあまりにネガティブな影響を及ぼしてしまうのです。

運命のパートナーと出会い、互いのセックスで満足できれば、このようなネガティブな感情の渦を生み出しませんし、性病の心配もありません。なにより肉体だけの快感ではなく、魂ごと一体に溶け合うようなすばらしいセックスを体験すると、パートナー以外とのセックスを必要とは思わなくなります。

もちろん、常にいいときばかりではなく、離婚の危機もあるでしょう。それでも決して互いに深い傷を残すような裏切りはありません。愛と信頼で結ばれた二人は、魂が一体となる悦楽と、愛に溢れた子供たち、そして互いの自己実現の支援と励ましをもって、人生を生き生きと生きていくのです。

## 運命のパートナーが必ず存在する理由

では、そのような運命の相手をもし失ってしまうとしたら？ 死で相手を失うことを恐れるために、パートナーを愛することを恐れることがあります。これは、スターウォーズでアナキン・スカイウォーカーがダークサイドに落ちた理由でもあります。

自分が死ぬ以上に、相手の死を恐れるのは、運命のパートナーであればこそその恐れかもしれません。こんなかけがえのない人ともし別れたら、もう二度と会えないかもしれない。そんな恐れに、私も長い間とらわれてきました。出産のたびに、パートナーの死を恐れ、眠れない時を過ごしたものです。

しかし、運命のパートナーと出会い、結ばれ、体験した愛は、拡大していけば、愛の存在である神との合一の体験と同じであることをいずれ知ることになります。彼と彼女が一つになり、生命を生み出すことは、神と自分が一つになって宇宙を、現実を生むのと同じであって、決して別れ別れになるわけではないと、徐々に気づくことになるでしょう。

この現実の中でも、もし自分にその気があれば、運命のパートナーと呼べる人と、また別の形で出会うでしょう。そして再婚することになるでしょう。一回の人生で、ただ一人だけと決める必要はないのです。ただ、同時に二人ということはありませんというだけです。

なぜなら、我々の身体がそうになっているからです。

人間の身体は、ほとんどが対になってできています。右目・左目、右耳・左耳、右腕・左腕、右足・左足…。対でないものは、口とへそと肛門と生殖器ですが、口と肛門は対ですし、へその緒は母親と対です。残る生殖器は、男性と女性で一对です。

男性と女性で一对一。このように人間の身体ができてるのは、とても神秘的なことです。

生殖器の作り自体の複雑さ、神秘さもさることながら、男性と女性で一对一で

一つとは、なんとチャーミングなんでしょう。この人体の作りに、さまざまな意味を読み取るなら、一人一人に、運命の相手がいないはずはない、と思うのです。このように人間の身体を作っておいて、相手がいないなんてことはあり得ません。なぜなら、そんなふうに気の利かない神様であるはずがないからです。

宇宙を作り、太陽と地球と月を作り、地軸を傾けて、四季を作り、時間と空間を作り、生物を作り、生態系を作った創造主が、そんなつまらないミスで、人間の一番大切な男女の関係において、犯すとはとても思えません。ここまで、緻密で見事な男性器と女性器を見ると、これほどの力を入れて作った部分を、一生使わずに終わらせるわけがない、と宇宙を信頼できるはずで。

しかし、これらはすべて、自分がどう考えるかです。

自分の抱く、信念・観念・想念が現実となり、その体験をします。もし、ここまで書いてきた考え方の一部分でも、自分の考えと共鳴するのであれば、それを自分の自由意思で選択し、自信の信念・観念・想念の一つにしてみてください。

いずれにせよ、運命のパートナーとの体験は、とてもスピリチュアルな体験になるでしょう。

## 運命のパートナーに出会うまでの7つのステップ

運命のパートナーに出会ったカップルにお話を聞いて思うのは、ほとんどの方が「強く出会いを求めている」ということです。出会った後で聞くので、一人でいた時の感情をそのまま語られる方は少ないのですが、「一度も求めたことがないのに出会った」という人はいません。

求めるとはどういうことかという、心の中に異性を求めるという強い感情を常に持ち続けているということです。その思いがあまりに強すぎると、渴望感や欠乏感に苦しみ、反作用を生みますが、その求める気持ちを手放していくことは可能です。あるものを手放すのは可能ですが、ないものを手放すことはできません。

パートナーと出会いたいという切実な思いが、パートナーと出会う上で不可欠なエネルギー源になります。

多くの場合、運命のパートナーと出会うまでに次のような流れをたどる場合が多いようです。

**触発→憧憬→欠乏→切望→燃焼→諦観→邂逅**

もちろん、この道一つではありませんし、時系列も入れ替わることがあります。また、実際に体験をしなくても、人の体験を聞くことや、フィクションを通して疑似体験することもある程度可能です。

その人の個性によって、さまざまなバリエーションがありますが、その本質的な部分は上のような変化をたどっている場合が多いように思われます。

## **1、触発—欲求の目覚め**

人間が自分の望みに気づくのは、自分の中からくる欲求か、周囲の人や物に刺激されるかのどちらかです。自分の中には、食欲、睡眠欲、性欲という身体感覚に直結するものから、お金、愛、物、さらに夢や理想など思考や感情の望みに至るまですべての欲求が眠っています。

ところが、自分の中からくる自分の望みには、意外に気づかないことが多いの

です。何かいららするな、と思ったら、時計を見て初めて自分がまだお昼ご飯を食べていなかったことに気づいたことがありませんか？ 時計という外部刺激によって、おなかがすいた、何か食べたいという自分の望みに気づいたわけです。

小さな子供は、おなかがすいたから不快だということがわからないので、空腹になると泣いたり怒ったりします。「おなかがすいた」ときちん自分の望みを表現できるようになるのは、かなり自分の感覚を理解した後なのです。

運命のパートナーと出会いたい、という思いには様々な欲求が関与しています。身体レベルの性欲、内的レベルでの愛の欲求、さらに相手を自分の思いのままにしたいという制御欲求、相手や周りの人に認められたいという承認欲求、一人で生きる不安を解消したいと願う安全欲求などなど、異性との結合を望む欲求は、お金に関する欲求と並んで、実に複雑で多彩な欲求によってできています。

そのような様々な欲求が自分の中に眠っているとは、普段はあまり気づきません。ところが、自分の周囲につきあい始めたばかりの熱々カップルがいたり、同級生の結婚式に出席したり、同窓会でママになった友人などに会ったり、クリスマスに次々カップルが生まれ、楽しそうにしているのを見ると、自分もそんな喜び、幸せを体験してみたいと思います。映画やテレビドラマ、雑誌、マンガなどを見て、触発される場合もあるでしょう。自分の中の眠っていた欲求が目覚めてくるのです。

このように周囲に触発され、自分の内部の「恋愛したい」「つきあいたい」といった願いを持つようになります。このような思いが、「運命のパートナーに出会いたい」「幸せな結婚をしたい」という高次の欲求に至る、最初の望みになります。

## 2、憧憬—憧れて求める

このような周囲の刺激と、自分の中に本来眠っている「愛を求める」欲求が結びつくと、自分にもそのような異性とのコミュニケーションを通じて、今まで体験したことのない感情や、イベントを知りたい、体験したいと願うようになります。純粹に、今まで体験したことがない体験に惹きつけられる感情が、「憧れ」です。

憧れの特徴は、ネガティブな感情を伴っていないことです。同時にまだ芽が出たばかりの感情でもあるため、身近な現実よりも、遠い世界に理想の相手を探してしまいます。たとえばアイドルやアーティスト、俳優、女優、モデル、芸能人、スポーツ選手などです。アニメやマンガ、物語などに出てくる二次元のキャラクターに憧れる場合もよくあります。

憧れとリアルが一つになった存在が、運命のパートナーです。

憧れは心理的に遠い相手に惹きつけられる現象として現れますが、それは自分の理想のパートナーの投影であり、運命のパートナーとして出会う相手のエッセンスが現れている場合があるのです。

異性に対し、ロマンティックで、非現実的な憧れを抱くことは、けっして逃避でもなく、無駄なことでもなく、愚かなことでもありません。これなくして、運命のパートナーと出会うという、もっともリアルでロマンティックな体験は得られません。

しかし、憧れはあくまで憧れだと、どこかで気付くことも必要です。

我々はまず、心の中で異性に対する憧れ、恋愛に対する憧れ、新しい関係性への憧れという形で、パートナーを求める中心核を育てます。しかし、それをわからせてくれた対象、アイドルなどの三次元、アニメなどの二次元の対象を、そのまま愛し続けても、それは実際に相互に愛し合う体験にはつながりません。

憧れに没頭しているときは、なかなかそう思えませんが、その憧れの要素を自分の中に落とし込むと、ちゃんとその要素を中心核に持ったリアルな異性に出

会えます。

何度も繰り返してきたように、思考現実化プロセスが動くからです。

憧れの存在がどうして、自分にとって憧れなのか。そこまで落とし込むと、それは自分の中で理想の相手、運命のパートナーを引きつける、強力な信念・観念・想念になります。

リアルな現実の中で、理想のイメージを担う存在に出会うこと、それは同時に、相手にとってもあなたの中に、理想のイメージが写っているということでもあります。

よく、恋愛を「熱病」とか「熱しやすく冷めやすい」などというのは、このイメージに投影による理想化が起こるからです。人間は、だれでも内面に神や仏や、あるいは天使や騎士が眠っています。そしてそれを感じ取る感性も皆持っています。いわゆる第六感とか、シュタイナーが言う「超感覚的世界の認識」です。恋愛という、強烈な情熱のエネルギーによって、一時的にそれが目覚め、相手の中にそれを映し出してみたり、自分の中のイメージを相手に映し出したりします。

これは、一度は是非体験してみてください。これがないと、運命のパートナーに出会うための、エネルギー源に不足します。たしかに、終わった後では「どうして自分はあるに夢中になったんだろう」と、騙されたような気持ちになりますが、それも大切なプロセスなのです。

我々はイメージに対しても甘美な感情を味わいますが、身体はそういうわけにはいきません。いずれ、身体も愛で満たしたいと願うようになります。

そうならないよう、イメージの世界から出てこないでいることも、その人の自由な選択です。しかし、「現実の世界では理想の相手なんか出会えるわけがない。だからここから出たくない」という思いがあるのなら、それは不安・恐れ・心配が存在するからです。

ならば「必ず私の理想を体現する運命の相手が現実に存在する」という信念・観念・想念に書き換えてみましょう。

そうすることで、次の段階へと大きく進み出すことができます。

### 3、欠乏—失恋と別れの体験

憧れの段階で、まだ恐れや不安を感じないで行動した結果、ほとんどはうまくいかないという体験をします。なぜかという、将来真に運命のパートナーとの出会いを体験したいのであれば、その究極の愛と融合の体験の前に、まずその相対性として、正反対の体験も知らなくてはならないからです。

これを「振り子の法則」と言います。

幸福とは、一度不幸の側に振り子が振れて、その振り子の手を離したとき、はじめて不幸から、幸福へと大きく動き、味わうことができるのだということです。

私たちは、日本というとても恵まれた平和な国に生まれながら、なかなか「幸せ」を実感できません。戦争を体験した人は、「今ほど幸せな時代はない」といいますが、生まれたときからいまの世界に生まれた若者は、これは幸せではなく当たり前の状態なので、幸せになりたければ、常にそれ以上を求めなくてはなりません。

しかし、今以上がもうそれほど望めないとなると、どんなに幸せな状況の中にあっても、幸せを実感として体験できないのです。

それはなぜかという、幸せと感ずるのは、もっぱらその人の主観であり、その主観は相対性であるということです。「幸せは相対的」というところで詳しく説明しますが、幸せを体験するために正反対の経験は不可欠で、それがあ



から出会いが喜び、感動、幸せとして体験できるのです。

愛を経験したければ、愛のない状態を経験しなくては、愛も体験できません。今、自分は愛の中にいるといくら知っていても、実感が伴いません。だから愛に感動できません。

豊かさを経験したければ、豊かさのない状態を経験しなくては、豊かさも体験できません。今、自分は豊かさの中にいるといくら知っていても、実感が伴いません。だから豊かさに感動できません。

健康を経験したければ、健康のない状態を経験しなくては、健康も体験できません。今、自分は健康の中にいるといくら知っていても、実感が伴いません。だから健康に感動できません。

生命を経験したければ、生命のない状態を経験しなくては、生命も体験できません。今、自分は生命の中にいるといくら知っていても、実感が伴いません。だから生命に感動できません。

幸せを経験したければ、幸せのない状態を経験しなくては、幸せも体験できません。今、自分は幸せの中にいるといくら知っていても、実感が伴いません。だから幸せに感動できません。

そのために、あえてここでは失敗を体験する必要があるのです。

もし、体験しなくても、幸せを体験できるのであれば、すでにその体験を生まれてくる以前の世で行い、魂レベルで習得した結果でしょう。その場合は、すでに体験し、学んだという充足が魂にあるので、それほど強烈な反対の体験を必要としません。ほとんどの人がそうでしょう。

幸せになるためのエネルギーが非常に強い場合、リスクーなことに挑戦したりします。それがこの理由です。

なかには幼なじみがそのまま運命のパートナーだった、ということもあります。許嫁がすでにいたりする場合は、幼なじみで子供の頃から互いに好きだったもの同士でも、弟が死んだり、ライバルが出てきたり、いろんなドラマを経たからこそ、最後に結びあう幸せが生まれるのです。

もしそれがなく、淡々と結婚していたら、その後きっと自分の幸福を確かめたくなくて、さまざまなドラマをあとで生み出したことでしょう。

結婚後であっても、結婚前でも、もちろんどちらだってかまいません。が、運命のパートナーとの出会いを体験し、幸せな結婚を味わいたいというのであれば、まず先に、ネガティブな体験を一通りしておく、あとはとても楽です。

若い頃の失敗は、甘酸っぱい記憶に変えることが可能だからです。失恋、別れ、傷心、孤独、劣等感等々、ネガティブな経験は、どれ一つとっても楽なものではありませんが、理想のパートナーに出会い、心と体が分かちがたく結び会えば、すべては帳消しにできてしまいます。

しかし、結婚後の失敗は、甘酸っぱい記憶と笑って済ませられるほど、簡単には済まない場合が多いのです。精神的な傷を周囲に与えるだけでなく、経済的にも、物理的にも、大きな問題を抱え込むことになります。嘘もたくさんつかねばならないでしょう。

自分を不幸にする種は、ほとんどまず自分が先に蒔きます。それが「無邪気」であってもです。何も知らないとき、恐れを知らないときにこそ、多くの人を損なったり、傷つけたりすることがあります。このへんは、村上春樹の小説群を一読するとよくわかると思います。

一見不条理に見える不幸の種は、自分の中にある「他人なんてどうなってもかまわない」という信念・観念・想念です。その種が「あなたなんてどうなってもかまわない」という人と出会う体験となって現実化するのです。

周囲を不幸にしないこと。それが自分を不幸から守る最大のプロテクションで

す。

それさえ気をつければ、大いに欠乏のプロセスを楽しんでみてください。

失恋や別離は、自分の中にこれほど涙を流す自分がいることに気付くよい機会です。自分の好きな人を直前にかすめ取られたり、片思いで思いを伝えられずに悶々としたり、どうやって声をかけていいかわからず、いきなりラブレターを書いてどん引きされたり、友人のカップルに嫉妬したり、夜の寂しさに耐えかねて自慰をしたり、かっこわるい自分、みっともない自分に嫌気がさしたりします。

それらすべてが、出会いを大いに盛り上げる神の演出だったことが、運命のパートナーに出会った後、目が覚めるようにわかることでしょう。

欠乏のプロセスは、心の土壌を肥沃にしてくれる、有機肥料なのです。

#### **4、切望—憧れから不可欠な望みへ**

欠乏の時期を過ごす中で、最初は淡い憧れに過ぎなかった、パートナーを求める気持ちが、切実な願い、望みへと育っていきます。このように、なかなか得られない時期が続けば続くほど、欲求不満が高まっていきますが、そのネガティブで不快な感情の裏では、より純化された願いが育っています。

人間にとって、ネガティブな感情は、それ自体は悪いものではありません。辛かったり、寂しかったり、迷ったり、相手を責めたり、自分を責めたりします。そんななかでも、他人を不幸にすることさえ気をつけ、誠実でいることにつとめていけば、うまくいかない経験は、どんどん理想の相手を明確にするための、よい情報になっていきます。好きになる人の共通点はなんだろうかと考えてみてください。

うまくいかなかったとしたら、何かが互いにフィットしなかったのです。自分たちの内面だけでなく、なにか外的な要因が原因で、分かれざるを得ない状況になったとしたら、それも互いのどこかがフィットしなかったからです。

フィットしないとは、その相手は運命のパートナーではなく、本物のパートナーが先に控えているという意味です。だから、なにかうまくいかないのです。そのときは、先が見えませんか、心が残ったり、残念だったり、言いようのない怒りや不条理さを感じます。

ここで大切なのは、どこまで「自分は絶対に間違いなく、運命のパートナーに出会う」と信頼しきれるかです。

なぜかという、そのようにすんなりいかないということは、前にも書いたとおり、自分の中に、疑いの心が育っている証でもあるからです。ほしいという切実な思いは、同時にいつまでも満たされないのではないかと、という疑いの心とセットで育っています。

ほしいという切実な思い、切望がなければ運命のパートナーを発現させられません。発現しなければ、出会うこともできません。これがアクセルです。しかし同時に、ネガティブな感情、恐れや迷い、不安などもいっしょに育ってきます。これがブレーキです。

ブレーキを引きずってもアクセルを踏めば進みますが、なかなかうまくは進んでいきません。ここで短気を起こして、アクセルを離してしまったり、いきなりハンドルを切ってガードレールに突っ込んだりせず、ブレーキを緩めることに意識を向けましょう。

ブレーキを緩めるための重要な情報をお伝えしましょう。

実は運命のパートナーは 最初から、一人に決まっているわけではありません。自分が強く望み、願った結果、それを受信した人が、運命のパートナーとして、その人の発した理想通りに発現するのです。それも、相互にです。

ある男性が願った理想の女性像と、ある女性が願った理想の男性像。それが宇宙空間に発信され、響き合い、受信した誰かが、相手の理想にそった形で変化し、運命のパートナーとして発現するのです。そして、発現する運命のパートナーは、往々にしてすでに知っている人の中にいることが多いのです。

つまり、それまでまったく眼中になかった異性が、たまたま何かの拍子に人が変わったように魅力的になっていることに気づき、びっくりして惹かれ、そしてこんな身近なところに運命のパートナーがいたという事実には驚くのです。

もちろん、会ったことのない人の場合もありますが、その人との出会いも、やはり自分ととても心の通い合う人を通じて出会う場合が多いのです。

人の出会いはすべて響き合いです。「類は友を呼ぶ」、類友の法則と言われているものです。

自分と同じエネルギー、同じ色彩、同じ和音を持った存在に引き合います。それは、同じ性格と言うことではありません。深い部分で共通する感じ、「気が合う」「感覚が合う」「趣味が合う」といった言葉以上の、よく似たレベル、よく似た精神的成熟度の人引き合うのです。

幸せな人は幸せな人同士引き合います。不幸な人は不幸な人同士引き合います。心が豊かな人は心が豊かな人と引き合います。金持ちと貧乏人が引き合わないとか、そういう意味ではありません。内的な部分の話です。

逆にパートナーとなる人は、ある意味正反対の部分もあったほうが、刺激的でもあり、陰陽の関係になりやすく、男女としての官能的な関係性も保ちやすくなります。

やはり、どこかでスリリングな部分もないと、友人や家族といった、男女ではない中性の関係になりやすいのです。それがいいのであればもちろん全然かまいません。友達のような夫婦でも幸せで仲のよい夫婦もたくさんいます。要は、あなたが何を望むかです。

男女の、少しスリリングで、そのぶん官能的な男女の恋愛を結婚後も楽しみたいなら、共通の波長の上に、正反対の要素も持った相手が望ましいでしょう。あくまで友人や家族の一員として、セックスを必要としない中立な関係を望むなら、共通の波長の上に同じ要素をもった人が望ましいでしょう。

この切望の時期には、うまくいかないことに焦ったり不安を感じる暇があったら、ぜひうまくいかなかったことをデータにして、自分の願う理想像をどんどんブラッシュアップして行ってください。試行錯誤しないと、すぐにはわかりません。そういう意味で、試行錯誤の時期に致命的な失敗をしないよう、セックス以前の段階で見極めて行ってください。

世間が与える処女や童貞を早めに捨てないと、みっともないというなんの根拠もないプレッシャーは、一切捨ててください。その焦りが、いかに多くの結婚早産、恋愛早産を生んでいるかわかりません。そしてそれは、往々にして致命的な傷を互いに残し、しかも子供にまで影響を与えてしまいます。人の評価を気にしないでください。

(死語ですが) 婚前交渉が悪いとかいけないとか、道徳的な価値観で言っているのではなく、互いの傷にならないようにすること。他人を不幸にしないこと。それを怠ると、結局自分に不幸のつけが回ってくるのです。なぜなら、人を不幸にすると、心の奥に罪悪感が残り、それが信念・観念・想念となって、現実反映するからです。

これは倫理でも道徳でもなく、自分が幸せになるための、物理法則です。

人をどれだけ不幸にしても、なんの痛みも感じない人間は、残念ながら(!)いません。どんなにそう見えても、深い神性は、それを見過ごすことができないのです。だから、自分の中に負った深い罪悪感が、自分で自分の首を締め付けるのです。誰も嘘と知らなくても、嘘をついた当人は知っています。

幸せになる覚悟を決めるとは、幸せになるために、不幸の種は決して蒔かないと覚悟するという意味です。

そのことだけ、深く心に刻んでおけば、あとは失敗を恐れなくて恋愛にチャレンジしてみてください。お互いに、見極めの段階にいることをよくわかった上でつきあってみてください。片思いになったり、片思いをされたり、好きになったり、嫌いになったり、好かれて嬉しかったり、好かれて気分が悪かったり、実に様々な経験をするでしょう。そして違うと感じたら、きちんと誠実に話し、互いに了解して離れ、次の人に向かっていきます。

ここで将来を誓い合うような相手との、劇的な出会いを期待しないでください。

実際、運命のパートナーとの出会いは、劇的と言うよりは神秘であり、ドラマティックでありながらあまりに自然であり、偶然が織りなすシンクロも、当人たち以外にはなんてことのないことが多いものです。

人に自慢するために恋愛しても、ほとんどうまくはいきません。

自分たちだけにしかわからない、自然で神秘的な流れ、小気味よいシンクロの連続（これもしばしば騙されますが）、周囲の祝福と応援、深い感激と感謝、新鮮さと若々しさ、美しさ、自信と活力。運命のパートナーの出会いは、そんな天国的な要素に満ちあふれながら、周囲から見ればあまりに自然で凡庸です。

そんな切望というポジティブな感情とネガティブな感情が入り交じた時期を、「それでも自分は諦めない」という信念で乗り越えることができた後、さらなる次の段階がやってきます。

## 5、燃焼—激しい情熱的な恋愛

運命のパートナーの出会いとは、どのようなものだと想像するでしょうか？

相手を見ただけで、なんの理由もないのに胸が高鳴る。天啓のように、「この

人が運命の人だ」という声が聞こえてくる。一目惚れ。胸がわしづかみにされる。何度も信じられないような偶然が重なる。この人こそ、理想の人だ！と瞬間的にわかる。

この燃焼のプロセスでは、実際に自分が「こうあってほしい」と願う運命のパートナーとの出会いを実際に体験します。相手を見ただけで胸が高鳴り、天啓のように「この人が運命の人だよ」と声が聞こえ、信じられないような偶然が重なり、やっと出会えたという思いが全身を駆け抜ける。そこまで過激ではなくても、まさに理想の人が目の前に現れたとしか思えないような体験をします。

でも、夢を打ち砕くようで申し訳ありませんが、ほとんどの場合、この人は運命の相手ではないことが多いのです。

もし、現在そのような恋をしている人は、この文章を読んでも絶対に信じないでしょう。まさに熱病のように、幻覚を見ているかのように、自分の理想の中にどっぷりとつかり込んでしまいます。独身の時でも大変なのに、これが結婚した後にくるとさらに大変なことになります。

周囲から見ると、そのような燃焼状態の中にいる人は、ある種、喜劇的な状態に見えます。あまりに現実離れした考えや、物語を作ったり、相手を理想化したり、偶像化したりします。この状態で、もし相手と身体まで一つになったら、そのまま死んでもいいと思うくらいの忘我の体験をするかもしれません。

まさに「トリスタンとイゾルデ」状態です。

ほとんどの人は、この状態こそ理想の状態、頭のヒューズが二・三本飛んだような状態を、究極の恋愛であり、幸福の絶頂であるとイメージします。そして、もしこのような体験をしないまま、結婚したとしたり、どこかで何かを置き忘れてきたような、欲求不満をくすぶらせたままで生きなくてはならないと感じていたりします。



これも、我々の中に潜んでいながら、ほとんど注意されることなく野放しになっていたが故に生じる、思考現実化プロセスの一つです。男女の性愛を通じて、さまざまな人間的束縛から解放されたい、自由になりたいという欲求です。最初の憧憬がそのまま現実化したような、魔法にかかったような感じで、のめり込んでいく自分をとどめることができないのです。

三次元や二次元という遠い存在に過ぎなかった、憧れや理想が、まるで生きてまま人間の形を取ったように目の前に現れます。

何度も騙されまいと疑っても、それを何度も何度も覆すようなシンクロニシティが連続し、逃れることもできないまま、のめり込んでいく自分を止めることもできません。狐に化かされるように、自分でもわかっているのに、愛情が炸裂するのをとどめることができません。

運命のパートナーに対する今までのプロセス、触発→憧れ→欠乏→切望でため込んだエネルギーが、ここで一気に解放されていきます。無数の恋愛物語がこのような絶頂体験を物語にします。

そして、そのほとんどがハッピーエンドでは終わらないように、いつかは現実の中に帰る日がやってきます。

それはほとんどの場合、ずたずたにされてしまいます。

ある意味では、命をかけて、人生をかけてでも手に入れたと思っていた、理想のパートナーに出会ってしまった以上、そうするより仕方がなかったのです。にもかかわらず、離れなくてはならなくなっていく。現実の相手は、自分の理想の投影に過ぎず、だんだん自分の思った相手とは全く違っていったことに気付くときがやってきます。最後はまるで幻のように消えてしまいます。

あれほどリアルだと思った相手に見た理想のイメージは、まさに現実化する寸前の強力なパワーをそのまま映し出していますが、我々の中に「そんな理想の相手と現実とうまくいくわけがない」という強力な信念・観念・想念があるた

めに、ごっそりと手放すことになるのです。

こうして、「やはりすべては幻だったのだ」という果てのない絶望感、失望感がやってきます。

このプロセスの重要さは、ここまでため込んできたエネルギーを、執着もろとも一度手放すことにあります。この恋愛体験は、悲恋に終わることがほとんどではありますが、やがては自分だけのかけがえのないすばらしい体験ともなるでしょう。それほどまで、甘美で愚かしい自分を味わうことは、滅多にないからです。

自分だけはそんな馬鹿なことはしないと思っていたのに、実際になってみると、同じような愚かしいことをするのです。でも、そのときの感情や感覚は、どんな芸術家でも体感できないほど美しく、魅惑的で、光に満ちた現実なのです。そしてそれは、近い将来に、まったく別の形で体験することになる祝福された合一の体験となってくるのです。

## 6、諦観—無力感とあきらめ

絶望と失望の後、やはり自分には理想のパートナーなど、存在しないのだと思います。命がけで、人生をかけてでも手にしたいと思って、がんばったのに、だめだった。もう二度とそんな思いは持つまいと誓うほどです。憎んだり、呪ったりできたらそうしたいのですが、それすら疲れ果てると、もう何もする気が起きません。

小さな最後の希望も、その後の恋愛でとどめを打たれたりします。

そして完全な諦めがやってきます。

完全な諦めがやってくると、恋愛も結婚も、どうでもよくなってしまいます。今まで、理想の相手に出会おうと思ってやってきた努力も、水泡に帰したと思って手放してしまいます。

ところが、ここまで自分自身を磨いてきた結果、執着がなくなったために、自分でも気付かないうちに魅力を発揮しているのです。一つの命がけの恋をすると、人間はものすごく魅力的になります。愛に深みが出てきます。人間性に立体感が備わります。人の辛い思いに敏感になります。自分でも知らないうちに、慈しみの心が備わってくるのです。

それにもかかわらず、無理に相手を求めようとしません。完全に諦められると言うことは、それほど全力を尽くしたと言うことです。全力を尽くさずに、中途半端な恋愛を続けていると、このステージまでなかなかたどり着けません。失恋したと言っては消費行動や飽食行動などにリバウンドするのは、まだ執着が残っている証拠です。

もう恋愛なんて、金輪際ごめんだと思います。あとは、自分を高めよう。自分を磨こう。人生を別の形で楽しもう。これからは一人で生きていこう。そんなふうに思うこともあるでしょう。

しかし、現実には皮肉なもので、自分の中に運命のパートナーと出会いたいというエネルギーを MAX までため、解き放った後、それにブレーキをかけていた疑いや心配、不安なども諦めによって消えてしまうので、実は一番理想の相手に会いやすいエネルギー状態に仕上がっているのです。

自分の強すぎる思いは、自分自身の執着をそのまま宇宙に反映させてしまいますが、エネルギーを解き放って自然に任せる状態になると、自分が追い求めないのに、向こうからやってきます。それも、まるで当たり前のように自然な人たちです。

この段階で注意することは、自暴自棄にならないことです。自殺したくなったり、何もかも捨ててしまいたくなって、犯罪を犯したり、自分を罰したりしな

いようにしてください。また、八つ当たりをしたくなって、人や自分を不幸にするようなことだけはしないでください。

ある意味では、一番どうしようもなく、希望もないこのときが、さまざまな運命のパートナーと出会ったカップルに共通する、理想のメンタリティなのです。

あと、もう一点誤解がないように言うと、最初から諦観しててもだめだと言うことです。ちょうど圧縮されたガソリンのようなものです。強く圧縮されたからこそ、点火し、爆発し、排気され、そして吸気されるという一連のプロセスが進んでいきます。圧縮されず、最初から気が抜けてては、そもそも推進力が起きません。思考現実化プロセスは「何も求めなければ与えようがない」というでしょう。

求め、願い、必要とし、切望し、そして手放す。求め求め求めて、そして手放す。

これを繰り返すことによって、世界は少しずつ自分の願いを形にし始めるのです。

## 7、邂逅—知らない間に出会っていた

出会いはあまりに自然にやってきます。このように長い（時間的には短かったとしても）魂の旅を経て、自分のなかに育ててきた、運命のパートナー、理想の相手に関する信念・観念・想念が宇宙に響き、そしてその響きをキャッチした一人の中で育ち、芽吹いた人がいます。その人は、もともと自分の近くだったり、自分に近い人が知っている人であることが多いものです。

でも、ほとんどの場合、まるで死角にいたように、隠されていたように気付きません。想像すらしません。その時点では、むしろ自分の好きではない人に分

類されていたり、恋愛対象にならない年齢だったり、立場だったりします。また、知らない人の場合もありますが、ほとんどの場合自分と深いつながりのある人が紹介してくれたりします。あとは、偶然です。

いずれにせよ、このときの出会いは、とても静かで穏やかです。自然すぎて、恋愛とは思えないほどです。自分が思い描いていたドラマティックで、ロマンティックなものではなかったかもしれません。でも、それは本来の自分のスタイルに一番合った、恋愛という狭い範囲を超えた、理想の人間関係そのものです。

話せば話すほど、思いが伝わる。一緒にいるだけで、何もしなくても心地よい。どこに行っても感覚があう。なんだかわからないけど、いつも居ることが楽しい。

まるで、ずっと昔から知り合いだったような感じがします。まだ知り合っていないのに、どうしてこんなに深くつながっているんだろうと思います。それがあまりに自分の知っている、恋人や夫婦の姿とは違うので、最初は戸惑うこともあるでしょう。

この相手が、自分の求めている運命のパートナーなんだろうか？

最初はそうは思えないことも多いでしょう。しかし、あるときスイッチが入ります。それまで隠されていたものが解き放たれるときがきます。それまで、少し時間をかける必要があるかもしれません。いくつかのシンクロも介入してくるでしょう。でも、その歩みは決して無理がありません。

ゆったりとしています。なにも恐れることはなく、焦ることもありません。それでも、確実に二人の間に何か結ばれ、はぐくまれていきます。

そして、ある朝、あるいはある夜、あるいは電話を切った後、おやすみを言って分かれた後、ふと気付くのです。ああ、この人が自分の運命の人だったんだ。この人がずっとずっと求めてきた人だったんだ。

それは意外でもあり、あまりに普通で、自然すぎて、ちょっと笑ってしまうほどです。やっと出会ったというのに、どうしてこれほど普通なんだろう。でも、心の深い深い奥でははっきりとわかっています。最初から、二人は会うことになってたんだと。そうでなくて、どうして今までのプロセスがあったんだろうかと。

そして、ここまでの謎が、すべて解き明かされていきます。

このようにして二人の間にスイッチが入って、はじめてまるで解き放たれたように、愛が満ちてきます。互いの深い愛情が互いに注ぎ込まれます。心と体を一つにして愛し合うことを、当然のことと思います。そして結ばれるとき、心と体が文字通り一つになっていくでしょう。

もちろんセックスに慣れていなかったら、慣れるまでは時間がかかるでしょうけれど、それもあまり問題にはなりません。むしろ、一つ一つが楽しくて仕方ないでしょう。身体の相性よく、価値観も共有できるのであれば、奔放にしたければそのようにできるでしょうし、穏やかにしたければそのようにできるでしょう。

この関係は、すべて二人の選択にゆだねられます。運命のパートナーと出会えたからと言って、結婚しなくてはいけないわけでもありません。そんな、書類上の決まり事など、どうでもよいことに感じられます。二人はいつも一緒にいたい。そのために便利だと思えば結婚するでしょう。どうせ毎日セックスを求め合うのなら、そのほうが経済的だからです。

結婚はもはや憧れでもなく、束縛でもなく、単なる通過儀礼に過ぎないと思うでしょう。

二人が準備を整って会うこと。それがすべてなのです。そしてこれまではおのおので、自分の人生の課題に取り組んでいたのが、今度は二人でいっしょになって、おのおのの課題に取り組みつつ、相手の課題をサポートし、そして二人の課題を二人で体験していくという、新しい生き方に進んでいくのです。

それはとても楽しく、生き生きとしていて、魅力に溢れた関係です。自然で、肩の力が抜けて、リラックスして、心から正直でいられ、さまざまなぶつかり合いや、一時的なトラブルも、むしろ創造的な現象として受け止めつつ、前向きに生きていける関係性になるでしょう。

これが運命のパートナーとの出会うまでの、よくあるパターンの一つです。

## 愛の創世神話

ここで、愛そのものを正確に定義づける必要があります。

すでに何度も触れてきていますが、愛とは本来宇宙のエネルギーすべてのことを指しています。なぜなら、「神は愛」だからです。逆に言えば、「愛のエネルギーが神」なのです。

古い定義では「愛は感情」の一部に過ぎないと考えています。そして「神は絶対者」「神は審判者」「神は厳格」だと思っています。

「神は愛である」と教えられても、全然結びついていません。せいぜい、神は人を愛することが好きなんだろう、程度の理解でしょう。神を人間と混同し、愛を感情と捉えるから、神が人間のように、愛を感情の一部として持っているに過ぎないと理解しているのですね。

さまざまな神話の中で、神は擬人化されました。本来それは、人間の中に神の分け御霊があり、人こそが神の子であり、神の分け御霊であり、神の一部であり、神なんだと言うことを伝えています。そこに、一神教の教えが加わったことで、神がたった一人の擬人化された存在だとイメージされるようになりました。

神とは、宇宙という広大な時間と空間を持つ三次元世界を創造した広大無辺な存在です。あまりに大きすぎて、とらえどころがありません。だから、賢者のイメージを神に投影して、親しみを感じられるように引き寄せたのですね。

確かに、人は神と同じ創造する力を分け与えられたが故に、神の似姿と言えるでしょう。でも、神が人の姿をしているわけではありません。人間は神の一部に似せて作られていますが、それは目に見えないエネルギーとパワー、すなわち「愛」において共通するのであって、肉体的にはむしろ動物に近い存在です。

神、という言葉そのものが、あまりに古い観念によって定義づけられているので、むしろその言葉を使わない方がぴったりくるくらいです。

広義の「愛」は、宇宙すべてのエネルギーのことです。そして、この「愛」のエネルギーが、宇宙を作っています。空間と時間も、気体と液体と固体も、遺伝子も細胞も、器官も組織も、鉱物も植物も動物も、すべてがエネルギーによって出来ています。

分子は原子から、原子は素粒子から、素粒子は量子から、そして量子はエネルギーであり、そのエネルギーを「愛」と名付けました。「愛」は三次元空間を越えた、すべての空間の中に充ち満ちているエネルギーの最小単位なのです。

広義の「愛」は、エネルギーです。宇宙を構成するすべてのエネルギーの最小単位が「愛」なのです。

もともと、「愛」は「与える」という性質を持っています。神が人々に与えるために、エネルギーからさまざまな物質や非物質が作り出されました。これが「与える」という意味です。

何物かが、何物かへ、与える。この宇宙に存在するすべては、神が自分の一部を人に送り与えた。だから、このエネルギーは、愛であり、すべてなのです。

「愛」が無垢なエネルギーのままだった頃、それは強い無限大のエネルギーの



固まりでした。そのなかに溶け込んでいる限り、愛は完璧に充足された状態です。なんの動きもなく、自覚も出来ず、体験もない。ただ存在として、あり続けるだけでした。

愛のエネルギーは、その果てしない快樂のエネルギーの中で、満足しきっていました。でも、あまりに充足している自分自身が、いったいどのような姿をしているのか、どのように出来ているのか、何一つ見る事が出来ませんでした。愛は、これほどの自分はきっと美しく、すばらしい姿に違いないと予感しました。でも、自分を見るには、自分からいったん離れなくてはなりません。

しかし、それにはとても大きなエネルギーが必要でした。

もし、あなたが自分の腕や、足や、目の玉を自分の身体から切り離すとしたら、大きな苦痛を伴いますね。いくら自分の姿を見たいからといって、自分の目の玉を取り出さなくては見る事が出来ないとしたら、どうでしょう。平気で目をくりぬけるでしょうか。

愛が愛しくないときは、愛以外の物は存在しません。だから自分を映し出す物を作るためには、自分の身体を切り離すしかありません。それにはとてもエネルギーが必要だったのです。

長い時間をかけて、愛はエネルギーを集中させていきました。そのエネルギー源は、好奇心だったのです。自分をどうしても見てみたい。感じてみたい。未知なる体験に愛はワクワクしたのですね。その、ワクワクするエネルギーを集中させ、強くバイブレーションを高めていったのです。

そしてついにエネルギーが臨界に達し、愛のエネルギーのわずかな一部が、痛みを伴いながら分離しました。愛は自分自身を体験し、味わい、理解し、楽しみたいという意図を持ったがために、愛のごくわずかな一部が切り離されました。原初の出産もまた、大いなる陣痛を伴ったのです。

それは、切り離されたと同時に、強いエネルギー転換が起こって、愛は自由と

いう無限小のエネルギーに変化しました。無限大の愛の固まりが、極限大の愛と極限小の自由に、分裂したのです。

無限大の愛をエヴァ、無限小の自由をアダムと呼ぶことができます。アダムはエヴァの一部なのです。聖書では、反対に書き換えられていますが。遺伝子を見ればすぐにわかります。女性の染色体の方が、男性の染色体よりも大きい。男性にはない遺伝情報を、女性は持っているのです。

無限大の愛に、無限小の自由は飛び込み、ついに願いがなかったという歓喜と感動で張り裂けそうになりながら、愛を体験し、愛を観察しました。そして、その美しさと、心地よさ、無限の快樂にうねりながら、自由はさらなる愛の体験を求めて、愛を分割し始めたのです。

これは卵子と精子という形で、人の生殖において同じパターンが取られています。

愛の生い立ちは、そのまま受精の原型なのです。大きな卵子に、小さな精子が飛び込んで、受精卵が細胞分裂し始める、生命誕生の過程とよく似ているのです。

現在の物質や生物には、エネルギーの進化の過程がいたるところに刻印されています。そこをつぶさに観察すれば、原初の成り立ちも理解できるのです。ゲーテやシュタイナーもそう言っています。

さて、自由はさらなる愛の体験を求めて、愛を分割し、愛から様々なものを生み出しました。そして宇宙が出来、銀河が出来、星々が出来、大気、鉱物、植物、動物、そして人間が出来ました。これが、宇宙の始まりです。物質的に見ればビッグバンですが、その現象を引き起こしたエネルギーの状態は、自由による愛の分割変容（メタモルフォーゼ）だったのですね。

こうして、愛は自由によって分割されました。とりわけ、最初に分割され、二つに分けられたとき、愛は愛と、愛と正反対のものに分けられました。

無限大のエネルギーのまま静止していた愛は、相対的な振幅をし始めました。0を中心にプラスとマイナスという二つの相反する領域を持つに至ったのです。そしてさらに、それは複雑な角度でプラスとマイナスが幾重にも掛け合わされていきました。それが次元というものになっていきました。

で、この三次元世界は、そのなかでもっともシンプルな世界です。だから、多くをプラスとマイナスの二次元で説明できるのです。

もちろん、それを越えた世界を説明することは出来ませんが、我々の住む三次元空間における、愛を説明するために、便宜的にプラスとマイナスのエネルギーを取り上げてみると、それが「愛」と「恐れ」なのです。

## 幸福は相対性

過去のもっとも不幸な状態との比較によって、はじめて今が幸せか不幸かがわかるものです。

戦争というとびっきりの不幸を体験した人は、どんなささやかな食べ物でも感謝でき、喜びを感じられるでしょう。実際には、あまりに戦争時と今はギャップがありすぎて、幸福とを感じるよりも、その差を埋められずに苦しんでいる人が多いようですが。不幸や貧乏に慣れすぎると、逆に豊かさが苦痛になるのですね。

とくに日本人は変化を苦痛とを感じるようにできています。農耕民族であったがゆえに、変化が大きすぎると、どれほど幸せがやってきたとしても、自分に幸せになる許可が出せないのです。あるいは、貪りすぎて、どこまで金を集めても、飽食しても満足できなくなったりします。

これは戦中戦後、経済成長、バブル崩壊というすさまじいアップダウンの中で、

世界の変化が大きすぎて、自分を幸せに生きるという自分へと変化させられなかったために起こっています。

逆に若者は、もともとの豊かさの中で、幸せの実感をつかめません。

これほど、同じ国、同じ時空で異なった体験、異なった精神性を持った世代が一つになっている状態は、過去に例を見ないでしょう。それゆえに、世代間の無理解、誤解、思い込みが広がって、これほど豊かな世界の中で貧しさに苦しみ、愛と慈しみに溢れた精神性の中で孤独と無理解に苦しみ、幸せな環境下の中に不幸せな部分にばかり焦点を当てています。

そして、「この世は結局地獄」という信念を現実化させているのですね。

幸せになりたくないのならそれでもいいのですが、幸せになりたいのなら、まず幸せになるための信念・観念・想念を持ち、そして周囲の人にも不安や恐れ、心配、迷いを起こすような言動を控えることでしょう。信念・観念・想念を変えたかったら、一番手っ取り早いのは、言葉を変えること。そして、自分の中のネガティブな感情を手放すことです。

この二つを日々実践するだけで、現実は大きく変化するでしょう。

## 理想のパートナーをヴィジュアル化する

もし、他人がそんなことをしていたら、気持ち悪いだろうなと思うかもしれません。

なぜなら、自分の中に明確な理想がないのに、「この人が理想の人だ」とわかるはずがないからです。ではどのように、自分の理想をはっきりとさせることができるのでしょうか。

まず、一番確実ですが、時間がかかるハードな道は、消去法です。

実際に、好きになった人がいます。うまくいけばいいですが、うまくいかなかったら、その人のどういう部分を好きになったのかを考えます。外見か、性格か、感覚か、趣味か、生まれ育ちか、セックスか。おおざっぱにわければ、外面か内面か、どちらが原因で好きになったのかと考えます。

では、今度はどうしてうまくいかなかったのかを考えます。

うまくいかないと、どうしても理由を外部に求めてしまいます。相手が悪いとか、何かが悪いといった具合に、自分以外の何かのせいにしたくなりますが、もしその人が本当に運命の相手なら、紆余曲折はあれども必ずうまくいきます。

うまくいかなかったということは、何か自分の中にフィットしない理由があるのです。同じように、それが外面なのか、内面なのか。

外面というのは、肉体的な部分も指しますが、相手の家族とか、仕事とか、収入とか、人間関係とか、その人がまだ明かしていない何かの原因です。

内面であるなら、好きで熱している間は見ても見ぬふりをしてきた相手の短所（と自分には思える部分）、気に入らないところ、ぴったりこない何か、感覚か、生きていく方向性か、夢か、価値観か、感性か、とにかくどこかに不協和音があるのです。それを認識します。

それがわかれば、好きな部分だけを取り出して、「必要データベース」に入れます。そして、「必要データベース」の中にある要素をすべて備えた人物をイメージするのです。

つまり、失恋すればするほど、データベースは豊かになります。より具体的で、データが豊富になり、リアリティが増すのです。

一切の妥協をする必要はありません。理想のイメージに、妥協はいりません。

ただ、「本当に自分が必要とする」ことに限られます。

「親が」とか「身内が」とか「友達が」とか「世間が」といった、第三者のための必要条件是、この際さっぱり忘れてください。自分の心が理想の相手に描くものが、自分の「必要」を反映しているかに注目しながら、イメージを作り上げてみてください。

そして、そのイメージができあがったら、絵でもいいし、コラージュでもいいし、CGでもいいし、物語などにしてもいいですし、何か生命のある人間として表現してみてください。そしていつも心の中に、そのイメージが住んでいるようにしてみてください。名前をつけたってかまいません。眠るときには、その理想のイメージに「おやすみ」を言い、朝起きたら「おはよう」と言ってみてください。

最初は「あほか」と思うかもしれません。ばかばかしいと思うかもしれません。もし、他人がそんなことをしてたら、気持ち悪いだろうなと思うかもしれません。もしそう思うなら、人に言う必要はありませんし、見せる必要もありません（まず、理解されないでしょうから）。

それでもやってみてください。騙されたと思って、自分を騙すつもりでやってみてください。

その生き生きした理想像は、本当に肉体を持たないのに生命を宿したかのように息づき始めます。想像しただけで、切なくなるくらい美しく、すばらしく、鮮明で、きらきらしていて、胸がドキドキするようなイメージになってきます。

その、胸の中の小さな輝く妖精が、ユングの言った女性にとってのアニムスであり、男性にとってのアニマなのです。

会話をしてみてください。まるで、生きた理想の相手とスカイプするように、話してみてください。実際に出会う彼は、彼女は、もうすでに同じ時空に存在しています。そのイメージは、相手に繋がるイメージです。その妖精は、相手

の中に宿っているハイヤーセルフと繋がっています。響き合っています。

遠くにいると思えば、いつまでも遠くにいます。でも、自分の中にいると思えば、どんどん相手も近づいてきます。やがて出会ったとき、自分の中にずっと見ていた理想の小さな妖精が、相手の中にも同じように宿っているのを知って、天地がひっくり返るくらい驚くことでしょう。

中身もちろん大事ですが、自分の外見も同じように大事です。

なぜなら、外見は中身を移す鏡だからです。生まれ持ったものを変えることはできないと思うでしょうが、その心配は全くありません。自分の中の神性を輝かせれば、外見も自ずとそうなりますし、逆に外見を自分の本来の姿に近づけると、内側もそれに応じて輝きを増します。相関関係があるのです。

自分の中だけ磨いていけば、外なんてどうでもいいという考えは、そもそも自分の中身の力を過小評価することになります。

逆に外見だけ磨いて中身がお留守というのは、見ていてかわいそうになるくらい外から見て滑稽に写ります。自分の中身を磨くというのは、自分に対して誠実であり、素直であり、そして感性が豊かであるということです。少なくとも、この本をここまで読んでいる人の中には、「中身がお留守」タイプの人はずいぶんいないでしょう。そういう人はそもそも本なんて読まないからです。

しかし、外見がお留守で中身重視の人は、どうしても異性体験が遅れがちになります。

そこで提案するのは、同世代で異性のファッションコーディネーターを作ってほしいのです。兄弟姉妹がいたら、それでもかまいません。従兄弟でもいいです。友達の中で、異性とは思っていない仲のよい友達がいたら、ぜひお願いしてみてください。

できたらある程度センスのよい人が望ましいですが、異性なら OK です。唯一

NGなのは親です。親は子供のセックスアピールを拡大するような服を選びません。むしろ抑圧する服を選びます。だからオタク系の方は秋葉ルックになるのです。あれは親の選択によるものです。自分でもどこで選んだらいいのか、教えてもらえないので親のいいなりになって、自分の性的な魅力をスポイルされているのです。電車男の例を出すまでもありません。

ファッションコーディネーターを、頼まれて嫌そうにする人は意外にいません。誰でも「あなたの感性が頼りなのだ」と頼まれて、悪い気はしないからです。そして、とにかく一度は全面的に、その人のアドバイスに素直に従ってみてください。ほとんどの人が、自分のファッションセンスがいかに関心の魅力を抑圧しているかを知ることでしょう。なかなか、素直に耳を傾けられないかもしれません。

こんな色は自分には似合わない。こんな服、とても着られない。恥ずかしい。

そういった劣等感が、自分の外見的な魅力を阻害しています。

髪の毛もちゃんとしたデザイナーにかかれば見事にその人らしくすてきにしてくれます。きちっと自己投資しましょう。

女性なら化粧、男性ならスポーツなども大事です。

自分の身体を愛せなくて、どうして異性があなたの身体を愛してくれるでしょう。理想の相手と出会うつもりなら、身体の隅々まであいてと一つになると知ってください。身だしなみの必要条件は、当然クリアしてください。口臭とか、体臭、髪の毛などなど、エチケットの基本は意外に人は言ってくれませんが、異性はそういうところを見て、知らない間に距離を置いてきます。

ただ、それがあまりに気になりすぎると、今度は赤面恐怖や潔癖症などになってしまいます。

まず、一番知ってほしいことは、人間の身体は「肉体」だということです。肉



体だと言うことは、排泄物が出るのは当たり前だと言うことです。誰でもそうです。それが恥ずかしいのではなく、それを知っていて、きちんと前向きにそれを捉えているかどうか、実は大切なところなのです。

自然に、その行為を受け入れ、捉えたとき、別になにも隠すこともなく、あっけらかんと話せます。その上で、きちんと美しくあろうとつとめている姿が、魅力的なのです。理想の相手は、魂のレベルではきらきら輝いていますが、肉体は排泄もするし、病気もします。

それも当たり前だと受け止めないと、セックスを楽しめなくなってしまいます。セックスは視覚的には綺麗とは言い難いところもいっぱいありますが、魂の合一が伴うとき、その動物性と神々しさが一体となるとところに、醜さと美しさの統合があります。愛する人の局部は、とても美しく見えます。

性器は見方によってはグロテスクですが、見方によってはこれほど精緻で神秘的なものはありません。肉体の美も醜も広く受け入れたとき、すべてが愛でできているとわかるからです。身体のすべてがそうなのです。

目に見える世界を理想化しすぎると、目に見えない世界との混同が起こってしまいます。物理的な現実と、魂の現実を別々の目で見えるように、受け入れ、味わっていくことを感覚としてつかんでください。そしてそれは、分かちがたく密接に関わっています。

ミズスマシは、水面下と水面上を同時に見る目を持っています。水面下は水、水面上は空気。それは別々の世界です。でも、酸素は両者に溶け合い混じり合っています。その両方の世界を別々に、同時に、見ているのです。

外は見る、中は観る。外は目で見、中は心で感じ、そして観るのです。

理想のパートナーを見て、そして観てください。それから自分を見て、そして観てください。理想のパートナーと自分を並べてみたら、どんな感じがしますか？ ちょっと恥ずかしいけどなんか似た雰囲気がある。悪くない。なんかこ

んな感じの夫婦やカップル、いるなあ。そんな感じがしたら釣り合っているのです。釣り合っているなと思ったら、出会いは近いでしょう。

見るなり、いやーな感じがする。あまりに変。バランスが悪い。みっともない。それは釣り合っていません。となると、相手のイメージがまだ正確でないか、自分がまだまだそこまで達していないのです。

理想のパートナーに出会う道のりほど、神秘修行にぴったりの課題はありません。なぜなら魂の「愛と一体になりたい」という欲求と、肉体の「性欲を満たしたい」という欲求は、共に最大の推進力となるからです。そのためには、魂と肉体両面での進化・成長が必要になります。これこそ、自分自身が体験したいと願っている方向なのです。

## 愛と性欲の分離と統合

人にとって、性欲と愛は、水と油みたいなものです。

この分裂が、性欲を愛と隔て、セックスを罪なるものにしてしまうのです。自慰のあと、性欲を持つ自分は醜く、汚く、恥ずべき存在だと強く感じます。セックスはその延長線上にあるのですね。

一方、愛は家族愛、母性愛が唯一絶対のものとして強調され、母親の愛こそ純粋な愛だと感じます。愛はセックスではなく、セックスは愛ではないと定義付けてしまいます。

男性にとって、愛は母であり乳房です。セックスは罪であり性器です。女性が上半身と下半身で分断されてしまうのです。幸せになるために最も必要な愛が、もっとも罪なるものと同じ居しているのですね。

愛とセックスは光と闇であり、憧れと嫌悪であり、天使と娼婦であり、水と油です。それが一人の身体、存在に共存しているように感じられるのです。この最大の矛盾をどうやって統合していくのかが、男性にとって最大の試練となります。

このクリアが一筋縄ではないため、セックスレスや離婚どころか、女性と付き合うことのできない草食系男子を増産させてしまうのです。

実物の女性に対する恐怖、不信はこのアンビバレントな自分自身の信念を投影した結果なのですが、それがリアルな女性そのものの本質だと信じこんでしまうのです。

ところが、二次元や遠い芸能人は最初からセックスの要素を排除できます。純粋な愛と、不純な性欲を別々に処理できるのです。だから、安心して愛することができるのですね。

これは女性も同様です。

その根底にあるのが、性欲への罪悪感です。この罪悪感は旧約聖書のアダムとイブの失樂園から、ありとあらゆる形で社会に織り込まれています。

キリスト教国でなくても、敗戦によりアメリカ文化に侵食された日本文化は、キリスト教思想をも深い部分で受け入れてしまっており、もともとの儒教思想に加えて、性に対する罪悪感は想像以上に根深いものがあります。

表層的なフリーセックスが外向的男子に受け継がれたとすれば、その裏に潜んでいたキリスト教的禁欲主義が内向的男子に受け継がれたとも言えるでしょう。

ディズニーが徹底的に表現した「結婚してハッピーエンド」というロマンティック・ラブ幻想はまさに禁欲的な道德観そのものです。そこに性的な要素は全く見ることはできません。

性的なシーンがドラマで流れた瞬間、親にチャンネルを変えられた経験を持つものは、多かれ少なかれ性にネガティブな信念や定義を植え付けられているはずです。

確かに、性欲は性欲のままでは単なる肉体的欲求に過ぎません。しかし、たとえ性欲と言えども食欲や睡眠欲と同じ、単なる生理的欲求です。それは罪でも何でもなく、中立的な行為のほうです。ところが、性には他の欲求にはない「恥」の感情がついてまわります。

本来、恥の感情とは防衛機能の一つに過ぎません。弱点や急所をむやみに晒すのは危険だからこそ、恥の感情によって覆い隠し、防御しようとしているだけなのです。ところが、この恥の感情をポジティブに評価できず、良くないこととして捉えてしまうのです。性に関わる全てが、恥すべきことだと捉えてしまうのですね。

それは肉体的な快楽をうまく受け入れることができないために生じています。自然界や神が、人間を喜ばせるために肉体に備えた機能を、信じることができないのです。苦痛を与える器官は信じられても、快楽を与える器官は信じられないのです。

もともと性器も性欲も、悪でもなければ善でもなく、至って中立的な機能です。ネガティブに定義付けるのも、ポジティブに再評価するのも、人間ひとりひとりの主観に過ぎません。それを社会や文化的な価値観で勝手にデフォルト化されているだけなのです。

愛は家族愛や友愛、人類愛まで広がるものですが、そこだけを強調しすぎて、異性の愛は良くないものだと捉えがちです。

しかし異性愛は性欲と掛け合わされることで、他の愛では味わえない情熱を備え、特別な愛になりうるのです。それは単に生命を受胎させるだけでなく、創造エネルギーそのものを生み出すのです。

性欲に関わる罪悪感を解放すると同時に、蒸留され純化されすぎた愛を地上に引き戻すことが不可欠です。そしてはじめて、愛と性欲がひとつになり、愛する人と体ごと融け合う最高の幸福を味わうことができるようになるのです。

男女を単位に地上に大きな愛のエネルギーの柱が立ちます。その二人が解き放つエネルギーは周囲を大きく変えるのです。

愛は心配、愛は恐れ、愛は不安、愛は罪。

このネガティブな定義を、愛は信頼という強力にポジティブな定義へと変えることができるのです。それは、さまざまな問題を根底から変化させる、大きな力になりうるのです。

## 運命のパートナーは存在するか

大辞林によると、運命とは「人間の意識を超越して人に幸不幸を与える力。また、その力によって巡ってくる、幸不幸のめぐりあわせ」とあります。

この定義に従って「運命のパートナー」を論理的に考えてみると、「運命のパートナー」とは、自分の意志とは無関係に、何かの超越した存在が定めた、逃れたくても逃れられない因縁の相手だということになってしまいます。

自分が望もうが、望まなかりうが、運命が決めたパートナー以外の人を選ぶことが出来ないというのです。もし、その相手を見つけ出すことができなければ、たとえすてきな人と結婚したとしてもうまくいかず、一生幸せな結婚などできないことになります。

この定義に従うなら、運命のパートナーに出会いたいなら、ベストの選択は「何

もしないこと」でしょう。

どうせ、その人以外に選ぶことが出来ないのなら、何もわざわざ苦勞をしたり、ここまで書いてきたような内的努力などする必要はありません。しなくても、出会えるわけですから。

実際、世間多くの結婚を見てみると、自分の理想や内的な直感に意識を向ける人はわずかで、ほとんどの場合は「成り行きで」「行き当たりばったりで」「衝動で」「できちゃったから」結婚しています。

外的にはいろいろしているように見えますが、実のところ結婚に向かって、内面的なレベルアップを真剣に行っている人は希です。内的には何もせず、運命と衝動に身を預けてしまう。だから、その相手が自分にとっての幸せに繋がる相手なのか、何もわかりません。

感情の赴くまま、その場の盛り上がりで恋愛し、子供が出来てしまい、結婚してしまう。あるいは、学歴とか勤め先とか年収、外見、性格、趣味といった、変化しやすい、その場限りの限られた情報に基づき結婚を選択します。

これでは、結婚は博打に等しい。リスキーなギャンブルです。

たとえば悪いですが、世間の結婚は競馬と同じです。馬券を買うとき、競馬新聞を読み、様々な情報を集めますが、結局はどんな情報も結果を推測するための情報にはなり得ません。自分が何を選択すればいいかわからないから、不確定な未来を少しでも晴らすため、ささやかには励ましに過ぎない情報を必死で集め、あとは運に任せて行き当たりばったりを選ぶしかないと考えます。

これらすべては、運命に対する考え方、定義の問題です。多くの人の中で、以下のような運命のネガティブな定義が強く働いています。

それは、

「運命は自分の思い通りにはならない」

という定義です。

結婚は、運命的な出会いをベースにするが故に、運命の定義によって、結婚後の幸福に大きな違いが生じます。

今までの運命の定義を無意識のままにしておけば、「人間に運命など変えることなど出来ない」「自分は運命をコントロールできない」「運は理不尽でどうにもならない気まぐれなもの」というネガティブな信念がそのまま野放しになっています。

かといって、このようなネガティブな信念に対抗し、「力尽くまで運命を変えてやる」「運命なんて信じるものか」「自分は絶対に運がいい」などと無理矢理行動し、ネガティブな信念を押さえ込もうとしても、かえって抑圧し、強化し、強烈なりバウンドを食らってしまいます。

運命に関するネガティブな定義のために、「結婚に関する諸説も、すべて結果論に過ぎない」と思いがちです。結婚して、うまくいくのかどうかなど、実際に一緒になってみない限りわからないではないか。結婚に関する本の多くも、このような考え方の上に書かれているため、心の内側に響いてきません。

結婚に関する法則性も、真理も、根拠も、先を見通す羅針盤も、今を生きるための地図も、多くの人々は存在しないと思っています。世間一般に信じられている根拠のない流言と、統計と、占いだけが、唯一のものだと思ってしまいます。

考えても、明確な根拠がない以上、結婚はわからなくなるばかりです。

多くの人々は、「結婚は運命の仕業である」という信念・観念・想念を持ち、ネガティブな運命観に基づく現実を体験しています。そして「自分は運が悪かった。だから結婚もうまくいかなかった」「結婚できなかった」という定義を、

より強化しています。

結局、多くの人々の「結婚観」は、悲観的な「運命観」を前提にしているのです。

実のところ、すべての夫婦は、すべてのカップルは、その時点において運命のパートナーなのです。運命の定義が好ましいものではなかったから、「運命のパートナー」と出会ったのに、うまくいかない現実を引き起こしてしまっただけなのです。

幸せとは言えない結婚だったとしても、その相手は運命のパートナーだったのです。一生結婚できなかった人も、「これが自分の運命だったのだ」と考え、「独身というスタイル」と運命的な結婚をしたのです。

実は「運命のパートナーと幸せな結婚」が実現できたかどうかは、結婚観の問題なのではなく、運命観の問題だったのです。

## 不幸を呼ぶ運命観を書き換える

では運命観とはなんなのでしょう。

現在、多くの方は、最初にも言ったとおり、運命とは、この現実の中で、我々の認知を越えた存在によって左右され、翻弄される、不条理性だと考えています。

結婚に関して言うなら、出会った相手が理想のパートナーなのか、それとも落胆や失望を招く相手なのか、我々にはわかりようがなく、それはもっぱら運命という不条理性によって左右される、曖昧で、予測できない、不確定なことだと思ってしまう。



つまり運命観とは、この現実、この三次元をどのように定義し、考えているかと言うことでもあるのです。

多くの人々は、現実が不条理で不確定で、先の見通しが立たないと、恐れおののいており、その恐れや不安を正当化し、諦め、飲み込むために、目に見えない運命の神という曖昧で気まぐれな暴君を作り出しました。

この曖昧で気まぐれで不条理に充ち満ちた、危険な運命の神に、結婚までもがゆだねられているとすれば、幸せになるのはきわめて困難だと言わざるを得ません。

ネガティブな運命の神は、宝くじに代表されるように、ごく一部の幸運なもの、大多数の不運なものに分けてしまいます。その間に、明確な根拠はありません。すべて、ランダムです。これでは、たまったものではありません。

しかし、これらのネガティブな神、ネガティブな現実観、運命観は、すべて人間の不安と恐れが作り出した幻想に過ぎません。

我々は、もともと宇宙や現実はそのようなものだと思っていますが、実のところ、それは反対で、人間が恐れや不安で現実を見つめ、定義づけているために、このような現実を創造してしまっているだけなのです。

たとえ幻想であっても、その信念・観念・想念を深い部分に抱えているのであれば、思考現実化プロセスは正確にその信念を反映します。それゆえ、現実は、わざわざ我々の望みに従って、不条理な現実を作り出すのです。

「ガラスの仮面」という有名なマンガがあります。この物語の後半、「紅天女」に関する話の中で、主人公のマヤは、師の月影先生に「魂の伴侶とは本当にいるのか。私にもそのような人がいるのか」と問いかけます。すると、月影先生は「あなたにいますかどうかはわからないが、もし魂の伴侶と出会えば、必ずその人だとわかる」と言います。

実際にマヤは魂の伴侶と呼べる存在に出会うのですが、様々な障害によってなかなか結び合うことが出来ません。また、師の月影先生も、魂の伴侶と呼べる存在と出会いながら、結婚することなく死別しています。

この物語は、魂の伴侶というすばらしい存在は確かに存在するけれども、出会うのは難しく、仮に出会えたとしても、現実には様々な問題や障害が起こり、一瞬結ばれるのみで、結婚という形にはなり得ない、と語っています。

さかのぼれば、シェークスピアの「ロミオとジュリエット」もそうです。ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」も、「ニーベルングの指輪」におけるジークフリートとブリュンヒルデもそうです。「失樂園」も、「ノルウェイの森」もそうでした。

運命のパートナー、魂の伴侶との出会いを描こうとすると、皆最後は死で、幸せな結婚には至りません。幸せな結婚に至るのは、ディズニーの子供向けファンタジーだけですが、我々はそこにリアリティを見いだすことがなかなか出来ません。

それはなぜなのでしょう。

## 人生に対する不信と疑いを手放す

私たちは、これほどまで現実を信頼していません。現実を、愛ではなく、不安と恐れを通して見つめています。

「現実とは、自分の思い通りにはならない」「心の世界と、現実の世界は、常に反発し合っている」「理想と現実とは分裂する」

我々は、これらの信念を、数千年もの長い間強化し、反芻し、疑いのないもの

としてきました。

これこそ長い間、人類が強固に抱き続け、憎しみすら抱きつつも、望みを捨て、諦め、受け入れてきた信念に他なりません。だからこそ、その通りの現実を生み出すのです。

しかし、今や我々の神性に繋がる直感は、このような不自由で、不幸を甘んじて許容するかのような、苦痛と諦観に満ちた信念を受け入れようとはしません。長い間、代々受け継がれてきた後天的な信念よりも、神に繋がる内的な直感の力のほうが強くなってきています。

なぜなら、すでに今という時代は、天国に限りなく近いところにまで育ってきたからです。

物質的な栄光だけに及ばず、精神的な栄光すら、受け入れて良いところにまで、現実世界は育ってきました。我々はこれまでの、地獄的な世界観を手放し、天国的な世界観へとアップデートするだけで、現実を一気に愛と自由と豊かさに溢れた世界へとシフトできます。

そのために必要なことは、強固に根付いている、恐れと不安の信念を手放し、愛と信頼に信念を書き換えることです。そして思考現実化プロセスの存在に気付き、理解し、制御するスキルを身につけることです。

古い信念を手放し、新たに書き換えるためには、数々のパワフルな信念が必要です。しかし、それほど困難なことではありません。日本という国の霊性は、我々の中に神の分け御霊があり、現実はすべて映し鏡である、ということをはるか古代に見抜いていました。

現実そのものは鏡なのです。我々自身を映し出しているだけです。

もし、現実が不条理で、不確定で、不安定だと感じるなら、我々の思考こそが不条理で、不確定で、不安定なのです。矛盾しているのです。それを、古代の

人々は「我（が）」と名付けました。「鏡（かがみ）」から「我（が）」を取り除くと、「神（かみ）」になると言われるのは、この真実を明らかにしています。だからこそ、古代の修行法は皆、「我」の滅却を主目的としました。

「我」とは「執着」であり、「執着」とは恐れと不安から来る「欲求」です。

この欲求を手放したとき、不安と恐れフィルターは消え、一人一人の奥底に輝く「内なる神」が輝き出します。そのとき、鏡は真の姿を映し出します。

## なぜ現実が不条理なのか

我々は自分の中に、神の分け御霊があるとは知りません。仮に知ってはいっても心から信じていません。相変わらず、現実の中に、実際には何もないのに、恐れや不安を見いだそうとします。

お金の不安、生きていく不安、健康の不安、暴力の不安、死の不安、愛の不安。無数の不安のすべてが、自分の中にある大きな強い力に気付かず、自分を弱く儂い存在と考え、現在の苦しみ多き状態から脱皮しようとしなくて、とどまり続けようと躍起になっています。

それが執着であり、欲求です。

安全でありたいと願う安全欲求。人に認められたいと願う承認欲求。自分の思い通りにしたいと願う制御欲求。皆と一体でありたいと願う一体欲求。皆と離れていたいと願う分離欲求。

執着とは、この五大欲求のことです。この五つの欲求はすべて、不安と恐れエネルギーを持っています。この恐れエネルギーを手放し、内なる神が輝き出すとき、一人一人が愛と自由の道を自ずから歩み出すのです。

我々は今もなお、我を中心に据えて生きています。執着・五大欲求を日々心に抱き、宇宙に解き放ちます。

我々の内なる神は「愛」と「自由」と「豊かさ」を求めています。思考と感情は「不安」と「恐れ」を解き放ちます。

それゆえ、愛を求めながら恐れを放ち、信頼を求めながら不信を放ち、確信を求めながら不安を放ち、自由を求めながら束縛を放ち、幸福を求めながら不幸の因子を放つのです。

我々は毎日の中で、どれほど多くの不安・怒り・憎しみ・妬み・無力・批判・否定・欠乏の、言霊と思念を放っていることでしょうか。それなのに、我々は毎日、どれだけ多くの平安・愛情・慈しみ・誇り・力・賞賛・肯定・豊かさを求めているのでしょうか。

この願いと思いの果てしない矛盾こそ、現実が不条理となる真の原因ではないでしょうか。

現実とは、そんな我々の矛盾した願いと思いを、その通りに映しているだけなのです。いつか我々が、自分で自分の現実を作り出しているという、本当の自由に気づけるように。

## 運命の定義を書き換える

運命の定義を今こそ変えてしまいましょう。

我々は、自分の中の信念に気付いた瞬間、それを換えることができます。なぜなら、人間は思考する葦だからです。思考することができなければ、書き換えることはできません。思考することができるというだけで、我々は自分の中の

信念・観念・想念に気づき、そこに変更を加えることができます。

ルドルフ・シュタイナーが「自由の哲学」という著作の中で、「人間は思考する存在であるが故に自由である」と語っています。我々は思考によって、思考現実化プロセスを認識することができます。

自分自身の内的な望みに従って、現実を作り出している「内的なひな形」—社会的な古い定義や同意（ファームウェア）、先祖代々伝わってきた古い時代の信念や観念（OS）を、思考によって革新（バージョンアップ）し、更新（アップデート）して、あなたの現実世界（ディスプレイ）を自由に変化（カスタマイズ）することができます。

現実のすべての理由・ひな形はすべて自分の中にあると思考によって認識できます。思考によって思考のひな形である信念を、自分の好みに合わせて変化させ、現実をも変化させることができます。

ただ、今までの我々は、思考現実化プロセスに意識的ではありませんでした。一部の人々が漠然と、そうではあるまいかと感じていた程度でした。多くの人々は無意識に心の内に書き込まれ、世間一般に信じられた同意や、先祖代々伝わってきた古い信念・観念・想念が、現実を勝手に作り出すのを、そのまま受け入れてきました。

どれほど、それが自分の「内なる神」の告げる望みや願いとかけ離れていようと、現実を黙って受け入れ、諦めるしかありませんでした。それゆえ、多くの人々は自由を感じられず、運命や神という名の不条理な暴君を作り出すしかなかったのです。

しかし、今や我々は、思考現実化プロセスが宇宙の法則であることを理解し、受け入れようとしています。この法則を利用し、制御することによって、一人一人の内なる神の望む人生を創造することができます。

それは、我欲の命ずるまま、勝手気ままに人生を創造できるという意味ではあ

りません。例え、思考現実化プロセスを理解しても、内なる神との密接なコミュニケーションがない状態では、船のこぎ方を知っているだけで、コンパスがないようなものです。自分自身の真の望みがわかりませんから、強い内的なビジョンと信念を形成できません。

結婚という一大イベントも同様です。思考現実化プロセスに気付くと共に、内なる神とのホットラインを作り出し、自分の内なる神が望む異性のパートナー像を受け止め、そして現実創造を待ちます。このように出会ったパートナーこそ、真の魂の伴侶であり、自分の中の神が作り出した現実に現れ出た神なのです。

我々の中には、このようなパートナーと出会うことを阻む、無数のネガティブな信念・観念・想念を持っています。今こそそれを手放し、新しいパワフルな信念に書き換えてしまいましょう。

## 書き換えワーク

真っ白な紙とペンを用意してください。

そこに自分の中から思い出す限りの、ネガティブな定義付けを書き出してみましよう。

「結婚とは…である」

(結婚とは人生の墓場である・結婚とは恋愛の終わりである…など)

「現実とは…である」

(現実とは厳しいものである・現実は小説より奇なり…など)

「人生とは…である」

(人生とは儚いものである・人生とは失敗の連続である…など)

「男性は…である」「女性は…である」

(男性は信用できない・女性は愚かである…など)

「子育てとは…である」

(子育ては自己犠牲である・子育てはお金がかかる…など)

「運命とは…である」

(運命とは悲劇的なものである・運命に屈してはならない…など)

「私は…である」

(私はおっちょこちょいである・私は貧乏人である…など)

いくらでも出てくるでしょう。

このようにして、一見真理と思われること、決まり切ったことと思いついて、一つ一つ書き出してみるのです。よくよく考えてみれば、その多くは根拠がないことに気付きます。

親の言葉や先生、マスコミなど、限られた見識によって作り出された思い込みに過ぎません。第三者。親や世間が「世界とはこういうものだ」と教え込んだものは、ほとんどの場合、単なる思い込みに過ぎません。

地球は丸くて青いとみな信じています。しかし、本当にあなたはそれを見ましたか？ 写真で見ただけでしょう。それを真実だとする根拠はなんですか？

もちろん地球は丸くて青い。それにはきちんと理由があります。天体の動き、暦、季節などの移ろい、また分光の法則やオゾンのスペクトルなどを知れば、地球は確かに丸く、青いのはなぜか、根拠がわかります。



結婚に関して、ここまでいくつかの法則性を提示してきましたが、世間で言われる多くの結婚観、結婚に関する法則は、法則ではなく主観に過ぎません。

思考現実化プロセスという法則を理解し、自分なりにその整合性を確認することによって、今まで信じてきた多くの定義づけには、実は根拠がないことがわかってきます。

こうして根拠もなく信じ込んできた古い観念、定義を手放し、新しい自分の見つけ出した経験と思考に基づく根拠のある定義に書き換えていきます。

すべてを自分の望み通りに再構成してみてください。

心の内側から「そうそう、それこそ僕の望む宇宙の姿だ」「それこそ、私の望む宇宙よ」と喜びがわき上がるような世界をイメージしてみてください。

本当に、一日に何万もの人が餓死する世界があなたの信じる世界でしょうか。環境を破壊し尽くす世界が、あなたの信じる世界でしょうか。セックスレスと、離婚と、「人生の墓場」と揶揄される結婚で満ちあふれた世界が、あなたの信じる世界でしょうか。

もっと違う世界であってもいいはずですよ。

## **馬鹿馬鹿しいと感じるのは古い観念が邪魔しているから**

「馬鹿馬鹿しい」「こんなことになんの意味があるのか」などという声が聞こえてきたら、それこそまさに、古い信念・観念・想念の声です。さっさと手放してしまいましょう。

古い観念の特徴は、「恥」の感情を刺激するということです。

内的な望みに従って行動しようとする、最初は恥の感情がブレーキを踏みます。そして、否定的な思考がわき起こり、行動を止めることを正当化しようとします。

このようなとき、もう一度自分の心の願いに立ち返ってみてください。あなたの行動を馬鹿馬鹿しいと思う自分は、何を求めているのでしょうか。心の内からわき起こる憧れや願いは、何を求めているのでしょうか。

バカみたいに見えることと、愚かであることは全く違います。

世間の諦観から離れ、自分の心の望みを実現させようとする人は、世間から見ればバカみたいに見えることでも、かまわずやり続けます。

愚かであるとは、自分の中に神の分け御霊があることを無視し、思考現実化プロセスに背を向け、運命と環境に左右される不条理な人生を「こんなモンだ」と不平不満を言いながらも受け入れ、諦めてしまうことです。それは愚かと言うより、もったいないことです。せっかくの楽しみ、せっかくの幸福を味わうことなく、この世界から去ってしまうのですから。

今の世界がこうなのは、私たちがそうだと思っているからです。

戦争が蔓延した第二次世界大戦時に、多くの人々はあの状態を「異常」とは思わず、受け入れたのはなぜでしょうか。どうして、ホロコーストや核、大量の戦死者が出るまで、戦争の拡大を容認したのでしょうか。

我々も、同様に未来の人々からこのように思われるでしょう。

「どうしてこれほど環境破壊や、富の不平等や、大量の核兵器や、不信感だらけの人間関係がまかり通る時代を承認していたんだろう」と。

私たちに必要なのは、ただ想像力だけです。この地上は本来どんな状態であってほしいのか、何を望むのか。地上は本来天国足るべくあるのか。地獄を容認

する世界なのか。

先日あるテレビ番組で、「世界の核を廃絶することは可能か」という議論を、著名人が行っていました。

一人の専門家が「可能だ」と楽天的に言うと、ほとんどの参加者が、怒り心頭に達したように「不可能だ」と叫び、「可能だ」と述べる専門家を攻撃していました。

そういう怒り狂った姿を見て楽しむという趣向なのでしょうが、著名人が必死の形相で「核が廃絶されることなどあり得ない」と力説する姿は、どこか気の毒でした。

彼らは、心の深い部分では廃絶して欲しいと願いながら、そんなことなど起こりえないと何度も何度も反芻し、苦しんでいるのです。だから、彼らの前で、「可能だ」などと気楽に言う専門家の楽天的な態度に、許し難い怒りを感じたのでしょう。真摯であるからこそ、陥りがちな悲観論です。

彼らは誰一人、自分の信念や定義が、この世界に大きな影響を与えているというパワフルさに気付いてはいない様子でした。テレビに出るほどの著名人ですら、現実という悲観主義の巨漢に押しつぶされ、自分は卑小で無力だというネガティブな信念に喘いでいるのです。

## 新たな運命の定義

可能か不可能かを人間自身が決めつける必要はありません。

だからこそ、オバマ大統領は「核を廃絶する」となんの根拠もなく言い切ったのです。今はなんの根拠がなくとも、大統領のようなひとときわパワフルな存在

が口にし、多くの人々が受け入れることで、不可能が可能になるという思考現実化プロセスの力を彼は知っていたのでしょう。

実際そうやって、今までも多くのパラダイム・シフトが行われました。新たな技術やシステムが生み出され、不可能が可能になった歴史を我々は知っています。これはマクロであろうと、ミクロであろうと同じことです。

「運命」という何かわからない「神」「超自然」など存在しません。

私たちがイメージする、厳格な「審判の神」や、気まぐれな「幸運の女神」など存在しません。全部、私たちの信念・観念・想念の壮大なる演算結果が、現象を生み出しているだけです。

私たちの中にあるプログラムが、現実を作り出しています。現実を引き寄せているのです。

**「運命とは、内なる神より導き出された真の願いが、想像以上の現実を創造すること」と定義してみましよう。**

**「運命は自由に変えられる」と定義してみましよう。**

**「運命とは私たちの認識を広げることで、自分の願い通りに、または、願い以上に変化させ得る」と定義してみましよう。**

これにより、思考現実化プロセスの真のパワフルさが現れます。

運に身を任せ、諦めるのではなく、自分の内なる神のパワフルさを信じて、身を任せるのです。自分の内側に、神の創造力を感じ、信じて、任せるのです。

自分の中の神に、宇宙のメニューからオーダーし、できあがってくるのを待つのです。多くの場合、できあがったそれは、自分の想像を凌駕したすばらしい体験を提示してくれるでしょう。

これが新しい運命の定義です。

運命とは、「生命の運び」という意味です。「生命」とはすなわち「神」のことです。神とは、宇宙の外から自分の中まで働いていて、宇宙と自分の架け橋となってくれる、愛のエネルギーの固まりです。この愛のエネルギーの固まりである神が、我々のオーダーに基づき、最高のタイミングで、最高のやり方で、最高の華麗さで、最高の粋な計らいで、現実が運ばれてくるのです。

## 運命のパートナーをあなたが創造する

さて、このような新しい定義により、あらためて「運命のパートナー」を考えてみましょう。果たして、「運命のパートナー」は存在するのでしょうか。

この問いかけには、意味がありません。なぜなら、存在するも、しないも、すべて自分の望み次第だからです。

あなたが「運命のパートナーがいる」と思えば、いるのです。そして新たな運命の定義に基づいて、愛のエネルギー体である神が、内なる神の願いに呼応して、あなたの予想を凌駕するほどのすばらしい異性を、最高のタイミングと、最高の華麗さと、最高の粋な計らいで創造し、あなたのもとに運んでくるだけのことです。

あなたが「運命のパートナーなどいない」と思えば、いないのです。あなたが「運命のパートナーなど必要ない」と思えば、必要ないのです。たったそれだけのことなのです。

もし望むのならば、新たな信念に書き換えましょう。そして日々そうあり続けましょう。そうすれば、現実となるでしょう。現実となっても、信念を強化し続けましょう。そうすればますます、その通りの現実が強化されるでしょ

う。

愛や信頼は、現実をその通りの色に染めていきます。不安や恐れは、現実をその通りの色に染めていきます。

運命のパートナーは存在するのか。答えは「望めよ、さらば与えられん」です。

## 私はあなた、あなたは私

新たな運命の定義によれば、「運命のパートナー」とは、魂の半身です。

魂の半身とはどういう意味かということ、「自分の中に彼の半分がいる」「自分の中に彼女の半分がいる」という意味です。出会う前から、すでに相手の魂が自分の中にいると感じるから「半身」なのです。

彼は自分の中に小さな彼女が自分の中にいるように感じ、彼女をかけがえのないものとして愛し、身体を持った姿で出会いたいと願います。ユングはこれをアニマと言いました。

彼女は自分の中の小さな彼が自分の中にいるように感じ、彼をかけがえのないものとして愛し、身体を持った姿で出会いたいと願います。ユングはこれをアニムスと言いました。

その魂の半身を通じて、相手と語り、相手を知ります。

ほとんどの場合、そこまで意識化されることはありませんから、夢で出てくるかも知れませんが、映画やテレビ、歌や詩の中にそれを見るかも知れません。作品を通じて「なぜ自分の内面を、これほどまでわかってくれるのだろう」と感じます。

様々な作品が、魂の半身を生み、育てるための手助けをしてくれるでしょう。それが高い芸術であろうと、エンターテインメントであろうとかまいません。すべての作品の中に気付きはあることでしょう。

このように大切に育てられた魂の半身が自分の中で見えてくれば、その強い魂のエネルギーを受け止めた、同じ波長を持つ身近な人が必ずいます。そしてその人の発信したのものも、自分の中に流れ込んできます。

出会うまで、魂のレベルでの相互交流が行われます。ビジョンがはっきりしていればいるほど、相手もまた鮮やかに目覚め、育つのです。自分も同じように相手の抱くビジョンに導かれて育ちます。

これが「あなたは私、私はあなた」の真意です。

## 美しい生命のギフト

このようにしてお互いを育て合った二人は、出会わずにはられません。準備が整い、出会う段階に達すると、それまで覆われていた封印が解けます。そのとき、あなたはこんな身近なところにいたと気付き、願った以上に魅力的な相手の外観と内面に感激することでしょう。

あとは、そのギフトを受け取り、信じるとともに、感謝と感動を、常に新しくあり続けることです。

人間は幸福に慣れやすく、不幸に敏感です。身体のすべてが健康であったとしても、歯の一本が痛むだけで、感謝よりも嫌悪感で満たされてしまいます。ネガティブな感情を手放すことを常に心がけましょう。感情を解放することができれば、よきものはさらによきものとなり、不要なものは消えてなくなります。

感情解放、欲求解放に関しては「セドナメソッド」に関する情報をあたってください。

セドナメソッドの最大の恩恵は、どんな感情もただ手放すだけでよいということです。感情を解放すれば、ポジティブな感情はより強まり、ネガティブな感情は薄まります。自分を無理に変えたり、押さえ込んだりする必要がなくなります。

五大欲求を手放し、我を手放し、ネガティブな感情を解放する、シンプルで簡単な方法がセドナメソッドです。かつて、修行僧が長い時間をかけなくては会得できなかった、「空になるスキル」が、実に簡単に、誰にでもできるテクニックとして、シンプルナイズされています。

信念・観念・想念を書き換えても、すぐにはそれを承認できず、不安や恐れが出てきます。それを押さえ込み、目をそらしていても、逆効果です。強固に支えられてきた旧来の信念・観念・想念も、手放すことでネガティブな感情という支えをなくし、書き換えられていきます。

そして毎日の生活の中では、対話を大事にしましょう。言葉であれ、文字であれ、イメージであれ、ハグやキスやセックスであれ、コミュニケーションをとり続けることが、二人の間に「半身」の感覚を呼び覚ましてくれるはずで

一時的な軽い危機も刺激的です。それによって、失うことを疑似体験し、かけがえのなさを思い出させてくれます。そうすれば、再び熱い思いが戻るでしょう。

変化を恐れなくてください。愛と信頼を中心に、今を思い描きましょう。

あなたの中に神がいます。あなたの中に理想の相手がいます。あなたの中の理想の相手は、身体を持った相手へと繋がっています。彼女と、彼と出会ったとき、わからないはずがありません。あなたの持ち物がすぐにそれとわかるように、名前を呼ばれたら反射的に返事をするように、相手はすぐにわかります。



そのとき、思考はさして必要ありません。理性による判断を越えたところで、こんな内的な声が聞こえてきます。

「彼こそが君の望んだあの人なんだよ」「彼女こそが君の望んだあの子なんだよ」

その声を信じて、人生最大のギフトをどうか受け取ってください。それはあなたが望み、神が作り出してくれた、生命のギフトです。

そして大切にしてください。

それはあなたの半身であり、あなたを補完し、あなたをより高みへと導きます。あなたをパワフルにし、自由な愛の存在として、完璧な姿を取り戻してくれます。もちろんあなた一人でも完璧です。でも、相手と一つになることで、その完璧さは拡大し、正反対のものをも統合していきます。

女と男、陰と陽、月と太陽、凸と凹。

これらが一つとなり、中心ができあがります。

そんな存在をどうか望んでください。あなたが望みたいと思うなら。必ずいると信じてください。出会いたいと願うなら。

追伸

今回のレポートでは、具体的にどうしたら良いかのお話があまりできませんでした。具体的なサポートやワークに関する情報を、メルマガにて発信しています。興味がありましたら、メルマガへ登録してみてください。

[http://einetrie.com/mkmail/regist\\_page.php](http://einetrie.com/mkmail/regist_page.php)